～女性が大分を元気にする～

輝く★女性たち in おおいた

女性が大分を元気にする！

様々な分野で働き、
活躍する大分の
女性を紹介します!!

大 分 県

大分県では、多様性に富んだ活力ある地域社会を構築するためには、女性の活躍促進が必要と考えています。女性の皆さんが自分のライフスタイルに合わせて、イキイキと働くことができる社会を目指しています。

この事例集は、県内で働く女性の方々を紹介することにより、手にとって頂いた皆様に、様々な分野での女性の活躍を知っていただき、身近な目標として、また励みとして感じていただけるものと思っています。

今回、30名の方々に取材をお願いしました。皆さんの身近には輝く女性が他にもたくさんいらっしゃいます。大分の女性がさらに活躍し、大分県がさらに元気になることを期待しています!!

最後になりますが、今回取材に関して、快く協力してくださった女性の皆様をはじめ、所属事業所の皆様方、推薦してくださった方々に深く感謝いたします。そして取材・編集を担当した（有）週刊女性大分の編集長、スタッフの方々に感謝いたします。

平成27年2月

大分県消費生活・男女共同参画プラザ所長

もくじ

1.輝くおおいたの女性たち

麻生 加代 さん …… 1
車検整備に関するエキスパート

植木 奈穂美 さん …… 2
地域密着”街の法律家”目指す

大澤 真琴 さん …… 3
楽しい食卓をつなぐ手仕事

岡 しげみ さん …… 4
美術の保存修復の知識生かす

岡田 八重子 さん …… 5
市民の健康、地域ぐるみでサポート

岡田 有貴子 さん …… 6
困った人の力に!警察官の道を

小野 桃子 さん …… 7
レンタルドレスの専門店を起業

蒲池 裕美 さん …… 8
動物好きを一生の仕事に

神田 真美 さん …… 9
女性棟梁の道見つけ一直線

木許 志保 さん …… 10
地元が大好き!大分を元気にしたい

児玉 奈美 さん …… 11
銀行初 特殊店舗の支店長

三宮 佳子 さん …… 12
高齢者住宅等の無料相談所開設

柴山 久美子 さん …… 13
工学部で学んだ知識を生かす

菅本 夕子 さん …… 14
経験を重ね、ガイドの仕事にやり甲斐

大海 くりこ さん …… 15
故郷で福祉の道を選ぶ

田口 有子 さん …… 16
伝統を守り新作にもチャレンジ

田崎 江梨香 さん …… 17
火力発電部門を希望して就職

田中 美智代 さん …… 18
夢を持ちつづけ念願の店オープン

千葉 歩美 さん …… 19
宇佐市で初の女性消防士

手島 志穂 さん …… 20
数少ない女性技術職として

友永 貴子 さん …… 21
理系好き生かし酒質の科学分析

吐合 紀子 さん …… 22
障がい者をサポート、元気の出るアートを企画

平川 加奈江 さん …… 23
障がい者の就労支援を志す

深谷 美保 さん …… 24
西日本初の女性の現場監督

森 理英 さん …… 25
営業職は喜びの仕事

山路 しのぶ さん …… 26
石像物の保存、修復を手がける

吉田 聖子 さん …… 27
女性の特性を生かせるサービス業

吉長 あゆ さん …… 28
有機農法を学び栽培とケータリング

吉野 泰代 さん …… 29
まごころこもった笑顔で接客

渡辺 秋代 さん …… 30
あるものを有効に使い商品開発

2.大分県の取組

○ 大分県男女共同参画推進事業者顕彰 …… 32
○ おおいた輝く女性ネット☆交流会 …… 33
○ 働きたい女性のための託児サービス …… 34
○ HP おおいた女性チャレンジサイト …… 35
○ おおいたの女性の就労について …… 36

麻生（あそう）　加代（かよ）さん

玖珠自動車整備協業組合　専務

自動車整備に携わって40年

玖珠地区の自動車整備工場等で構成する協業組合に勤務して40年。組合員のところでは鈑金や一般整備を行い、組合では車検整備の上、各関係機関への手続き等を行う。パソコン化の取組みは早く、ネットワーク導入で仕事の効率化をはかり、先手必勝を信条に次世代に繋ぐまで「現役で頑張り、後進の道つくりをしたい」。

実質的な運営を任せられる

福岡県出身。学校卒業後、地元大手の建設会社に入社。経理を振出しに総務等各部署を経験。経理責任者として部下の指導にあたる。10年勤務の後、結婚退職し夫の地元である九重町へ。縁あって現職場に昭和49年事務員として就職。昭和52年からは専務（専従役員）に。40年になる。車検はピーク時には3000台くらい取り扱ったが、現在はかなり減少。効率化のためパソコンもいち早く導入。帳票や書類の無駄をはぶき簡略化。毎月予算を立てて進捗状況を把握しながら月次決算を行う。「計画が未達となりそうな場合は、組合員へ協力依頼や営業活動をしています」。

キャリアアップのために自分に投資

福岡の時には経理もそれなりに極めたつもりだったが、業種や制度が異なりキャリアアップのため大分や福岡の経理専門学校に通う。同じ仕事をずっと続けるなかでマンネリ化しないように常にチャレンジ精神旺盛な人。全て手書きだった事務をパソコン化するなど色々な変化に対応。「新しモノ好きなのでシステム化することで仕事も効率化した」。職場で心掛けていることは、目標や計画に向って努力すること。決めたらやり続け、やめない努力。「まず矢を放て！」「駒を打て！」。先手必勝が信条で何はともあれやってみる。「成就するまであきらめない」がモットー。厳しい社会情勢のなか「組合員にとって役立つ組合でありたい、地域一番店にしたい」と元気ハツラツ。

周りの力を借りることで働き続けられた

夫と姑の協力があって働き続けることが出来た。3人の子どもは出産の直前まで仕事をし、産後6週間で職場復帰。2才までは同居の姑が子どもの面倒を見てくれ、3才から保育園に預けた。家のことも家事全般は姑が7割、PTAや学校行事も姑が手伝ってくれた。親との同居を嫌う若い人には「周りの力を借りることで働き続けることができる。ぜひ同居をすすめたい」と周囲のサポートのありがたさを説く。子どもに十分な教育を受けさせるには女性も加勢して当然。親の背中を見て育ったからか、2人の息子の結婚相手も仕事を続けており、娘も仕事をしている。

大の本好き、自宅に1000冊

出産以外で入院したことも病気で休んだこともなく、休んだ方が体調が悪いくらいの毎日だが、子どもの頃からの趣味の読書が休日の楽しみ。大の本好きで定期的に購入。図書館も利用、嫁入り道具に本棚と本を持って来たその本棚には1000冊以上の本が並ぶ。特にジャンルにこだわらず気になったものを手にとる。「いくつになっても学ぶ姿勢が大切」。田舎での暮しも自分の意思があればどこにいても仕事は出来る。子育ては伸び伸び出来たので田舎で良かったと思う。

プライベート

仕事と同じで何でもやろうと思ったことは一直線で継続する。自宅でのストレッチはダイエットにも効果が出てスッキリ。和服が好きで何年かに一度自分へのご褒美に着物や帯を購入。たんすの中の着物は今まで自分が働いてきた証。「自分の楽しみにお金を使うことも大切だと思う」。

植木（うえき）　奈穂美（なおみ）さん

植木司法書士事務所

地域密着“街の法律家”目指す

10代の頃から弁護士に憧れ、京都の大学の法学部に進学。卒業後、アルバイトを続けながら資格取得を目指すが30才で方向転換。34才で司法書士合格後は神戸の司法事務所に1年、地元大分にUターンし3年間勤務し、2013年3月自宅近くの大分市森町に「植木司法書士事務所」を開設。地域密着を目指し「何でも気軽に相談してもらえる“よろず相談所”にしたい」とフットワークは軽い。

フットワーク軽く「女性・若い」を払拭

県下に司法書士は約170名、うち女性は20人強。女性では若い方から3～4番目という。最初に勤務した事務所の上司に、女性であること、若いということに対する周囲の目は「逆に活用するくらいになれ」とアドバイスされ「迷いはふっきれた」。39才で独立。生まれ育った鶴崎地区を事務所開設の地に選んだ。「街の法律家」として「何でも気軽に聞ける地元の困った時の窓口になりたい」と、地域の商工会青年部の会合や地区の集い、異業種交流会や各種セミナーにも参加、ファイナンシャルプランナー（FP）の最高位CFPの資格も取得。大分県FP協会の役員としても活躍中。司法書士会や行政の無料相談会にも参加する。

キメ細やかな対応心がける

相談内容は不動産の登記、相続、簡易裁判（140万円未満）、成年後見人業務などが主。女性であることや若いということから頼りなく思われたり、補佐的なイメージを持たれていると感じることもあったが、逆に司法書士名簿で調べ「話を聞いてもらうなら女性が良いと思った」と問い合わせがあったり、登録番号から「若い方のほうが話しやすい」と相談を寄せられることもある。「すぐには仕事につながることでなくても、案内役として他へ紹介し解決の糸口に役立ちたい」と、キメ細やかな対応を心がける。弁護士にチャレンジしていた苦しい時期も事務所を構えた今は「頑張ってきて良かった」と笑顔がほころぶ。

自分のペースで長く続けられる職業

事務所を開設して1年半。若い頃は男性に負けたくないと肩ヒジ張っていたこともあったが、現在は肩の力が抜け自然体で考えられるようになった。仕事と家庭を両立している先輩女性の働き方も色々なタイプがあり参考になる。今はまだ独身なので抱えるものや制限されるものが少なく自由。自分の納得出来る仕事を好きなようにやっていける身軽さはメリット。時間をうまく使える自分のペースで長く続けられる職業だと思う。女性の数も増え社会の認知も広がりつつある。色々な制度もだんだん整っている。今はこの仕事1本だけれど、枠にとらわれず柔軟に「色々な働き方があっていいと思う」。

敷居の低い「よろず相談所」に

事務所は森町バイパスに面したビル1階。グリーンを配した事務所は気軽にのぞける雰囲気。生まれ育った鶴崎地区は知人、友人が多い。お茶のみにぶらり立ち寄って雑談する「お客様や知人も」。人生の大先輩に「気にかけてもらっています」と植木さん。「どうしていいかわからないことなど何でも気軽に相談してもらえるような、敷居の低い“よろず相談所”にしたい」と、今後の課題に向けて仕事に集中。自分で決断して始めた事務所開設。「なるようになる」と、立ち位置や周りを気にせずマイペースでストレスをためないようにしている。

プライベート

「よく寝る」のが元気の秘訣。2年前に始めたゴルフはコースデビューの予定。友人にすすめられて行った高崎山での森林セラピー体験はとても良かった。仕事後、ウォーキングすることも増えた。「いつか海外で今とは別のことを学び直してみたい」という夢がある。好奇心や興味は持ち続けていたい。「学ぶ」のが大好き。

大澤（おおさわ）　真琴（まこと）さん

工房「木輪（キリン）」代表　木工作家

楽しい食卓をつなぐ手仕事

出身は仙台市。地元の短大（家政科）在学中に特別講師で湯布院の木工作家、時松辰夫氏の授業を受け「木材の美しさや魅力」に引かれた。卒業後弟子入りし5年半の修業を経て2006年独立。作業場のほか、自宅の一部を改装。作品の展示会を開催し念願のギャラリーを2014年にプレオープン。木工作家として「日常生活で使ってもらえるモノ作り」を目指し、木工を通じて社会貢献を提案する。

「木の美しさ」に引かれ、仙台から湯布院へ弟子入り

着色料を使用せず、素材そのものの良さを活かしたスプーンやフォーク。1つ1つ丁寧に手作りした作品は温もりを感じさせる。その木材の美しさに出会ったのは仙台の短大に在学中の2年。湯布院で「アトリエ・とき」を主催する木工作家、時松辰夫さんの授業。時松さんは湯布院を訪れる人やクラフトを目指す人にとって匠的な存在。商品開発や研究生の指導に取り組んでいる。冬休みに一度、湯布院のアトリエを訪問。「学びたい」という思いを深め、卒業後に弟子入りした。「修業時代は手がカサカサでした」と大澤さん。一番おしゃれが楽しい時期、同世代の女性の華やかな服装を横目に木の粉にまみれていたが、仕事が楽しくて仕方がなかった。

5年半の修業を経て独立　作業場を構える

木材業界は男性社会。厳しい状況も目にするが5年半の修業を経て独立。2006年の「高岡クラフトコンペ」入賞を機に本格的に活動をスタートさせた。北海道などでも見学し、貯金100万を元手に重機を購入。創業補助金も活用し作業場を構えた。作品は湯布院の有名旅館や大分空港等で取扱ってもらっている。県の首都圏販路拡大対策で、秋以降、横浜の高島屋などへの催事での出品も続々。木目や木の性質を見極め、木のもつ個性的な色を活かした器たちはデザイン性が高く評価されている。

育児経験から乳児目線のスプーン

湯布院のマチづくりの活動の中で知り合った夫は富山県出身。子どもを持ったことで作品づくりの目線が変わった。飾りものの作品ではなく「美しくかつ実生活で身近に使えるような日田の小鹿田焼が目標」という。日常使いしてもらうためにも価格帯をおさえるためにも作品の制作のスピードアップが課題。アイテムも増やしている。育児経験から乳児の目線にたち、乳児が噛んでも安心な素材や形、乳児の手に収まりやすいデザインにしたベビースプーンやファーストスプーンは好評だ。

念願の展示ギャラリーをプレオープン　地元と交流

自宅の一部を改装し念願だった展示ギャラリーを造り、2014年8月展示会を開催した。作品の展示スペースだけではなく「地域の人や子供たちが集まり楽しんでもらえる場にしたい」と大澤さん。木工を通じて社会貢献したいと言う思いを形にする木育プロジェクト「木のプール」作りを提案。しばらくは作品の制作に入るため展示ギャラリーは休む。材料選びから仕上げまでクラフトの工程は根をつめる。作業場では作品づくりに没頭し時間を忘れるほど集中する。使用する重機は危険と隣合わせ。ケガや事故に繋がらないように注意し、仕事を離れたらしっかり子どもと向き合い、気持ちを切り替える。出産後は子どもを抱いて湯布院の町を散策しながら店舗のディスプレイの勉強をしたり、今やれることを無理なく夫の協力を得ながらやっている。

プライベート

趣味は映画のチラシ収集。20年ほどのコレクションは「宝物です」。庭には花を植え、桑の実、野苺などがある。何を見ても感動する心を大事にしていきたい。

岡（おか）　しげみさん

大分県芸術文化スポーツ振興財団 大分県立美術館学芸普及課
学芸グループリーダー　学芸員

美術の保存修復の知識生かす

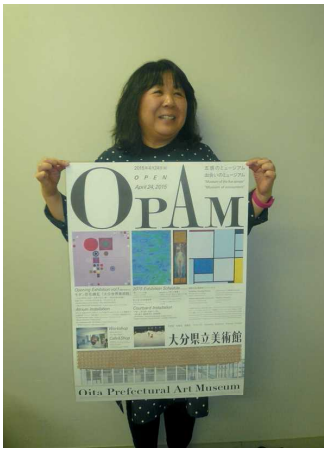
「五感のミュージアム、出会いのミュージアム」をテーマに2015年4月にオープンする大分県立美術館の学芸グループリーダー。多摩美術大学大学院修了後、ニューヨーク大学大学院で美術や考古学の保存修復の基礎を学ぶ。帰国後は学芸員として美術館勤務、美術展のコーディネーターなど美術と鑑賞者を結び「未知との出会い」「想像する楽しさ」を問う。2013年8月より大分で開館準備に携わる。

ニューヨーク大学で保存修復の基礎を学ぶ

美術作品の保存修復に興味を持ったのは多摩美術大学に入学してから。もともとは工芸、なかでも漆をしたかったそうだ。幼い頃から描いていた油絵を専攻したが、材料学のゼミを選択したことや絵画修復の工房で修復の手ほどきを受けたことから、作家ではなく「保存修復」の道を志す。大学院修了後、1981年ニューヨーク大学大学院コンサベーションセンターで美術や考古学の保存修復の基礎を2年間学ぶ。帰国後は学芸員として西武美術館／セゾン美術館、草月美術館に勤め、横浜トリエンナーレでは2001、08、11年の開催でコーディネーターとして活躍。多摩美術大学、武蔵野美術大学の非常勤講師を務め、大分県立美術館オープンに伴い新見隆館長の要請に応じて2013年7月より大分で暮らす。

美術館に携わる学芸員の仕事

学芸員の仕事の柱は収集・保存・研究・展示公開・教育普及の5つという。現在5人の学芸員をまとめるリーダー。新人の学芸員を育てることも仕事だが「学芸員のスキルはHow　Toではない。たとえば、作品の取扱いでは日常生活のなかで感じる四季や、作品がもともと置かれていた環境に応じて作品の展示環境を考え応用していく等、ていねいに行動を起すことが要求されます」。大分県立美術館のオープンは2015年4月。開館記念展の詳細も決まり、スペインやフランス、オランダ、イギリスなど海外の6美術館、国内は40数館の美術館から借用する作品が一堂に会す。大分の歴史、文化、風土が世界と出会う「大分世界美術館」のひとつひとつに向き合う。黒衣としての内部的な業務のほか、メディアの対応や他館との関係づくりなど超多忙な日々が続く。



知識や経験が求められる展覧会場

国内はもとより世界の美術館からマチスやダリなどの作品が大分へ運び込まれる。展示室の温度や湿度、さらに防犯など貸し出し条件のハンドリングのハードルは高い。現場で必要な様々な活動について知識や経験が求められる。美術館は「心の遊び場」。観るだけで音を感じたり、愉快になったり、共感を覚えることは「心の豊かさ」につながる。これまで観たことのない「未知との出会いや想像・創造を楽しむ場」として、上質なモノを紹介していきたいという。自身のなかでは子どもの頃に観たミロのヴィーナスは今も記憶に残る。幼い頃から美術に親しむ環境だった。子どもたちにもいいモノに触れ感覚で観る楽しさを、面白さを培ってほしいとも。

開館に向けて様々な対策に心をくだく

学芸員は展覧会の最初で最後の鑑賞者。「喜んでもらえることを願って」展覧会をつくる。成果も要求される。美術館では、展覧会以外の企画も展開する。大分県立芸術会館の5000点にも及ぶ作品の活用、大分県の新しい文化の創造、大分でしか出来ない最高のモノ…大分県立美術館開館に向けたミッションに取り組む。国内の美術館では保存科学や保存修復の専門家を抱えている所は少ない。美術館への引っ越し、展示室や収蔵庫の環境チェックなど開館に向けての様々な対策に心をくだく。

プライベート

出身は東京、大分は初めて。2013年7月から大分での生活がスタート。大分の食も楽しむ。「大分の鶏肉はおいしい。どこで食べてもはずれがありません」。

岡田（おかだ）　八重子（やえこ）さん

社会医療法人 敬和会 大分岡病院　敬和会地域連携統括センター長

市民の健康、地域ぐるみでサポート

宮崎県延岡市出身。中・高時代はテニス部で活躍。先輩に看護職をすすめられ進路決定。地元で看護師として働き、27歳で結婚を機に大分へ。第１子出産後、1993年大分岡病院に勤務。看護師長、看護部長を務め後進への道をつくる。その後、総務部長として院内外の業務を取りまとめながら働く人の環境づくりに動く。2014年10月より女性初のセンター長に就く。

地域の医療機関180施設と連携し健康サポート

現在、地域連携統括センター長として地域の医療機関との連携を密にし、患者がよりよい医療を受けられるよう市民の健康を地域ぐるみでサポート。健康の啓発活動や支援等の企画、運営をしながら時代のニーズに添った、納得のいく仕事を目指す。また法人内の介護老人保健施設大分豊寿苑、大分東部病院、在宅支援クリニックすばるとの情報共有を密にし、有効利用を促進している。与えられた課題だけではなく、常に考え工夫して体を動かす。その柔らかい雰囲気は女性管理職への勇み立つ姿は見えず、自然体で働きやすい職場環境づくりにコミュニケーションを大事にしてきた。

看護部長35才は異例の若さ

第1子を抱え大分岡病院への就職は「保育所あり」が決め手とか。2年後の1995年、皆春の大分豊寿苑立ち上げに看護師長として異動。1999年、岡病院に戻り看護部長の職に就く。35才の部長職は異例の若さ。横のつながりを大切に風通しのよい職場環境づくりに務め、気持ちを読みとり意思の疎通を図ってきた。「仕事が楽しい、がんばれるー」という看護師の声が何よりの喜び。12年半の長期となった部長業務を自ら見直し、看護師育成の強化と「新風が必要」との思いから後進の道をつくる。その後は総務部長として病院全体を見渡して院内外の業務を取りまとめる。

「白衣の力」はすごい

患者さんには常に笑顔で接し、求めることを瞬時に察知、対応することを心がけてきた。看護学校の頃、白衣を着ると心の切り替えができることを実感。「白衣の力ってすごい」と。仕事のやり甲斐、生き甲斐を持てるのも看護師の資格を得たことに始まる。病院も教育に関する費用を惜しまない。積極的に学びの援助をし、認定看護師資格を取るための6ヵ月、待遇を落とさず学費援助等のサポート体制。がん撲滅を目指す24時間リレー「リレー・フォー・ライフ・ジャパン大分」の運営にも初回から携わり、世話人としても活動。

生き生きと働く職場の環境づくり

働きやすい職場環境づくりに福利厚生企画など輪づくりを心がける。風通しの良い人間関係は、チーム医療にもつながる。2014年初の試みとして夏休みの学童保育事業を実施。プールや宿題、工作教室などを企画、実践し運営にも携わる。好評を得て冬休みにも実施。

仕事と両立、家族の協力

実家の遠い２人は互いに支え合い子育てをしてきた。夫は家事も協力的。子どもたちも小さい頃から家事の分担を覚え、兄は妹の保育園へ迎えに行っていた。「家族の力強い協力があって仕事を続けられた。感謝です」。その子どもたちもそれぞれの進路を見つけた。娘は今、看護学校で学んでいる。

プライベート

学会はじめ各会合の世話人、勉強会等で休日がつぶれることも多い。たまの休みは娘との買物を楽しむ。定年後は「ピアノを弾きたい」。

岡田（おかだ）　有貴子（ゆきこ）さん

大分県警察

一生、出来る仕事「警察官の道を」

看護師の母から女性であっても一生できる仕事をするよう言われて育った。学生時代は文学部に進んだが、中学の頃から陸上を、大学ではバレーボール部に所属する体育会系。地元大分に戻って来る就職活動の中で警察官の道を選ぶ。2001年、同期の女性は8名。2014年春から交番に勤務。地域住民の不安解消や治安のため、日々徒歩で巡回し声をかける。

地域の安心や防犯、徒歩で巡回

2014年春から交番勤務になり久々の制服姿。制服を着、帽子をかぶると身が引き締まる。徒歩で地域を周り声をかけたり、要望を聞いたりする「巡回連絡」のほか、交番をたずねる住民の対応。高齢者には交通事故防止や「オレオレ詐欺」等の注意をうながす。「姿を日常的に地域で見せることが、住民の安心や防犯にもつながります」と岡田さん。以前の職場では、DVやストーカー対応で被害女性の立場に立って様々な問題解決に務めた。仕事に就いた頃は、女性であることが戦力ダウンになるのではと悩んだこともあるが、結婚、出産を経てひと回り逞しくなり、精神的にも強くなった。母としての目線が広がり、独身の時には見えなかった立場や世界が広がった気がする。勤務は9時から17時45分。子育てのため当直は免除中。

困っている人の力になりたい

警察官になって13年。仕事をやめたいと思ったことは一度もない。「何より困った人の力になったり、人と関わることが好きな自分の天職だったのかも」と思える。どうしても男女の身体的能力の差は仕方がない部分もあるが、努力と女性ならではの細やかな気配り、ソフトな対応も役割の1つ。自分に何ができるのか考えて働くよう心掛ける。今は与えられた場所で自分の役割をしっかり、しかも柔軟にこなしたい。「岡田がいて良かった」と言ってもらえるよう、地に足をつけて頑張りたいという。

出産、育児が人としての幅を広げてくれた

子どもは2人。育児は実母の協力で支えられ、夫も休みの時は家事に協力する。子どもは予測不能で急に具合が悪くなり勤務中に迎えに行かざるを得ないことも起こるが、職場の理解で助けられている。それだけに「甘えることなくできるだけ頑張りたい」と岡田さん。育児途中で現場を離れることで焦りを感じることもあったが何より出産も育児もその経験が自分の視野を広げ、人として幅も広げてくれる大切な時間だったと思う。

各種制度を活用し仕事続けたい

これから成長していく子どもたちや、将来の親の介護など不安なこともあるが、各種制度を活用しながら好きな仕事を続けられる方法がきっとあると思う。女性警察官で集まることもあり、育児や仕事上の悩みなど先輩に相談したり、アドバイスをもらう。まだ少ないが、頑張っている女性の先輩の姿は頼りになり、目標にしている。勤務地は、古いまち並が残り、高齢者も多い。地域住民の要望に耳を傾け「安心と防犯に努力したい」。

プライベート

いつもは母に預けて見てもらっている子どもたちと、土・日や休みの日はできる限り一緒に過ごす。実家の母や友人、同僚や先輩とのおしゃべり、子どもたちと居るのが何よりも元気の素。

小野（おの）　桃子（ももこ）さん

クローゼット・ムーンヒル代表　株式会社 Moona cross 代表取締役

レンタルドレスの専門店を起業

「無ければ作ればいい」。大分で初めてのパーティドレスを扱うレンタルドレスの専門店「クローゼット・ムーンヒル」を立ち上げ、ドレスコーディネーターとして働く。子どもを抱えながら仕事探しに苦労したことから「自分のような立場の女性の雇用を創り出せるような事業展開を実現したい」と自宅の一室から始まったレンタルドレスの運営に全力投球するガッツな女性。

子どもを抱え職探しに奔走

出身は長野県。映画制作に憧れ大学は東京の芸術学部。映画関係の学科で学び、卒業後は映画の録音スタッフとして働く。その後結婚。夫の地元大分で暮らすことになり結婚式場のサービススタッフ、ウェディングプランナーとして働くが残業が多く専業主婦へ。長男が1才になる頃、夫が身体を壊し、無職に。「自分が大黒柱になるくらいの収入を得たい」と、子どもを抱えて職探し。ハローワークの紹介で就業訓練のwebデザインコースを受講することになり、3ヵ月の給付金の支給を受けながら学んだ。その後、web関係の派遣勤務をしながら仕事を探すが「特に資格も無い自分には短期の仕事しか見つからなかった」。就職することの難しさを痛感。

「無ければ作ればいい」という発想

子どもを自分でみながらやれる仕事はないか。東京の友達の結婚式の時にはよく利用していたレンタルドレス。探しても大分にはなかった。「無ければ作ればいい」。周囲の反対を押し切って自宅の1室にブティックハンガーに数着のドレスからスタート。サロン名は「クローゼット・ムーンヒル」。すぐ収入につながることや、ウェディングプランナーの経験も生かせた。知り合いのカフェにチラシを置いてもらったり、地元のブライダル誌に掲載されたりして次第に情報が広がる。自宅から別府の店舗を経て現在地の大分市萩原に2013年8月移転オープン。産業活性化プラザから紹介されたけんしん中小企業支援センターのアドバイスを受け創業補助金を受給、家具や調度品を購入した。

就業訓練のwebデザイン活かし経費節減

現在の店舗は数名のオーナーでシェアしている。パーティドレスや羽織物、靴、バッグ、アクセサリー等トータルでのレンタルや個別でも対応。来店での試着が基本だが、リピーターや小物のみはネット受付や宅配もする。就業訓練で学んだwebデザインの知識を活かしホームページやチラシを製作、経費節減につながっている。レンタル代を貯めて次のドレスを購入。コツコツと品揃えを増やしていった。大分に知り合いが少なく、口コミも伝わりづらい。レンタルドレスの認知度も低かった。それでも少しずつ「リピーターが増え、力を貸してくれる知人や協力者が出来て感激です」。自分の経験が少しでも参考になればとブログ「ビンボー起業シリーズ」に今までのことを紹介している。

子どもを抱え働く女性にチャンスを

現在、第3子を妊娠、2015年1月末が出産予定。再就職している夫も育児に協力的。「子どもは大好き、たくさん欲しい」。子どもを抱えながら仕事を探していた時の苦労から、色々考え過ぎず働きながら産んで育てられる社会になるよう、何か力になりたい。出産予定の2015年、店を任せるスタッフは、子どもを持って働く人にチャンスになればと思う。将来的には子どもを抱えながら働ける雇用を創出する事業展開を実現したい。

プライベート

何より家族が健康であることが第一。今の生活を楽しむことを大切にしたい。仕事が終ったあと、子どもを保育園に迎えに行く約20分の車中がリフレッシュの時間。子どもの笑顔に助けられている。

蒲池（がまち）　裕美（ゆみ）さん

メイプルアニマルクリニック　獣医師

動物好きを一生の仕事に

子どもの頃からの動物好き。資格を生かし一生の仕事としたいと獣医師を目指す。鹿児島の獣医学科に進み免許を取得。大学卒業後、日田の動物病院に勤務。主に家畜の牛の往診をこなす。28才で結婚。夫の転勤に伴い2年間福岡へ。福岡の動物病院では犬や猫を主とする小動物を担当。現在、大分市賀来のメイプルアニマルクリニックに勤務して5年目。獣医師として10年目。

最初の動物病院では牛の往診

出身は高知県。農家に生まれ働く母を見て育った。犬も身近にいた。鹿児島の獣医学科（6年間）で獣医師免許を取得。華奢な身体に似合わず、最初に勤めた日田の動物病院では牛の往診もこなした。現在、クリニックの獣医師は院長と2人体制。主に犬や猫を担当。日中の診療だけではなく入院も受け入れており、入院中の犬猫の対応も多い。「動物は言葉が通じないけれど、現在受け持つ犬や猫たちにしっかり向き合い、経験を生かしながら治療にあたっている」。

動物の状態の報告、密に対応

一世代上の獣医師はほとんどが男性で女性はごく少数だったが、同世代以降の男女比はほぼ半々。ペットブームで犬猫を飼う人が多くなったのも一要因。大動物を担当する時は少し力が必要だが、他にスタッフの協力もあるのであまり困ることはないが、3年間勤務した日田の動物病院ではちょっとした牛の動きで手首を骨折したことがある。診療中のひっかき傷などは日常茶飯事。動物の様子や飼い主の申し出をよく聞き、観察、経験から診断には自信がついた。院長に相談し、アドバイスを受けることも。いい仕事をするためにはスタッフとのチームワークが重要。情報の共有をしっかりとコミュニケーションを大切に、状態の報告や交換を密にして対応している。

2人目を出産、育児を楽しめるように

勤務は8時15分から19時だが子どもが小さいため17時までの勤務。第1子の出産・育児は余裕が無く神経質になりがちだった。保育園の4月入園にあわせて7ヵ月で職場復帰。現在、年長組と0歳児の第2子は違う保育園だが色んなことに慣れ「子育て自体を楽しめるようになった」。次女は産前6週間前まで勤務し、産後5ヵ月で職場復帰。「忙しくバタバタしているのが性に合っている」。急な子どもの病気で自分がどうしても休めなかった時、夫に休んでもらったこともある。長引く場合は、大分市の病児保育を活用している。夫も2人目で育児自体もサポートも「慣れて来たようです」。

飼い主の喜びは自分のことのようにうれしい

動物は言葉が通じないので当初、診療する際どこが悪いのか診断に困ることもあったが、たくさんの犬や猫たちの診療を重ねていくなかで次第に自信がついた。手術や強い薬が必要か否か、動物の自然治癒力にまかせるのがよいのか飼い主の気持に寄りそいながらも、的確なアドバイスを心掛ける。小動物の寿命は10年から20年。小さい頃からその成長を見、顔見知りになる。「治療して良くなった時の飼い主さんの喜びの声と元気になった動物の様子が励みになりうれしい。忘れずにいたい」。

プライベート

子どもたちと接する時間は短いけれど一緒に居る時は笑顔で濃い関係を持ちたい。6才の長女とは友達のような会話が楽しめる。早起きして5時から5時半くらいのほんのひと時が自分の時間。飼っている猫もこの時間だけは自分が独占できることがわかっているのか「近寄って来て甘えます」。

神田（かんだ）　真美（まみ）さん

藤丸建設有限会社　設計・一級建築士

女性棟梁の道見つけ一直線

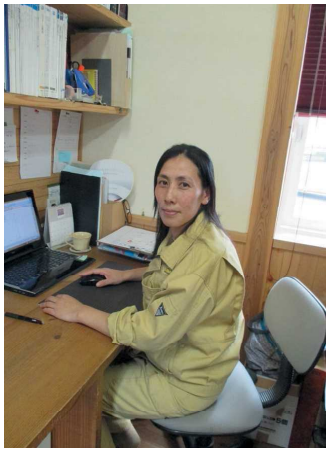
由布市湯布院町出身。子どもの頃、近所で家を建てている大工さんの姿に憧れた。中学になって将来の仕事を考え「手に職を付ける職業」を志望。親戚に女性の設計士がいたことから大分工業高校建築科に学び、卒業後は地元大分のゼネコンの設計部に入社。机上の設計に疑問が芽生えた頃、雑誌で女性棟梁の記事を目にし「これだ！」とスッパリ退職。藤丸建設の求人を見つけ応募、1997年再就職した。

男社会の中、大工修業の日々

自分の求める道を見つけたことやタイミングよく再就職出来たのは運が良かったと思うが「本気で求め、考え、アンテナを立てていたら思いは通じてつながっているのではないか」と神田さん。現在入社18年目。大工修業からスタート。大工の技術は身体で覚えて修得するものなので努力が必要。道具や用語を先輩について１から教えてもらいながら「役に立っていないこと、女性だから使いづらいのではと心苦しかった」。建設業界は男社会だということは十分理解。キツイ、暑い、寒い、重い等の弱音は吐かないと意識した。入社当時は女性の先輩は１人。棟梁には入社３年目。現場の仕事ぶりを見て「墨付け」を任せられ、一棟建て上げた時に棟梁として認められる。現場を全く知らないまま設計していた頃を考えると「こわくなります」。設計は入社12年目から係わった。

12年を経て木造住宅の設計担当

藤丸建設は木造の注文住宅を主とする工務店。現在は設計を担当、設計した住宅の棟上げは土台から１日で組み上げる大切な行程で、周りの協力を得ながらやり上げる。棟梁になってからは下についた若い男性から当初「男の棟梁に付きたい」と言われたこともあったが、男女の性別ではなく人次第。自分の仕事や技術に自信があったし、プライドも持っていたので「しっかり指導することで認めてもらった」。身体能力は男性には勝てないが、施主との打合せの時などは同性であることが話しやすく感じてもらえることも多く、とことん納得するまで耳を傾けた。



1級建築士等の資格取得にチャレンジ

現場の経験があるからこそ出来る設計は、無駄なものは無駄とわかり施主のアドバイスが具体的に出来るようになった。会社の方針である資格取得のすすめも積極的にチャレンジ。一級建築士や一級建築大工技能士の資格を取得。「資格そのものというより、取組んで努力することが自分の自信につながっていると思う。肩書きでなく腕（技術）の分野でも資格を取ったことで施主の信用・信頼につながった」。今後も関連するインテリアやエクステリア、カラーアドバイザー等も学んでいきたい。

木造建築の良さを知ってほしい

人生で最大の買物である住宅を一棟一棟、気持ちよく住んでもらえるように心を開いて希望をしっかりと伝えてもらうことが大切。打合わせの時はとことん話を聞き出す工夫も出来るようになった。施主の本音や思いを察したり、問いかけたり…働き続けることで得たものは大きい。もっともっと多くの人に木造建築の良さを知ってほしい。独身で家庭や子どもなど自分には制限されるものはないので仕事に集中できるが、両立している人は大変と思う。

プライベート

現在、同僚で大工棟梁の女性と同居。家に帰っても仕事上の相談をしたり、アドバイスをもらえるなど話せるのが楽しい。目下2人が住む家を建てており、休日は少しづつ話合いながら取組んでいる。プライベートでもつい建物に目が行き、仕事目線で見てしまう。「日々、勉強です」。休日の自宅の掃除が気分転換。

木許（きもと）　志保（しほ）さん

大分合同新聞社　編集局報道部記者

地元が大好き！大分を元気にしたい

「地元をもっと知りたい、地域のために色々な情報を発信したい」という強い思いから新聞社を希望し、2006年に入社。新聞広告営業、東京支社勤務を経験、記者になって4年。現在は編集局報道部に在籍。女性に関する問題、高齢者問題、子育て問題などを担当。「記者としての今の仕事が好き」。大分市出身。

入社9年目、さまざまな部署を経験

東京の大学を卒業後、入社。同期7人中女性は1人。1年目は新聞広告の営業担当として多くの地元企業を訪問した。2年目に東京支社に異動。5年間の支社時代、広告営業を4年、編集部の記者を1年経験。大分県関連のイベントや、県選出の国会議員の取材などを担当した。「新聞記事のネタは飛び込んで来るのではなく、自分で探して拾っていくもの。好奇心を忘れず、アンテナを広く張って情報に敏感でいることを心掛けている」。2014年1月から警察担当になったが、妊娠がわかり現在の担当に変わった。普段は夜勤があるほか災害などで夜間の呼び出しもあるが、現在は深夜業務を免除されている。

ハードな現場　女性の視点生かす

「夜討ち朝駆け」と呼ばれる取材を行う現場。事件、事故、災害など早朝から深夜まで取材活動が続くハードな仕事だが、当番制やローテーション勤務で対応している。最近は女性の正社員も増えたが、今のところ報道部の職場に女性の上司はいない。全体の正社員204名中、女性は22名だが「女性だからといって特に仕事上で苦労したり、困ったりしたことはない」という。記者の仕事が好きで、やりがいを感じている。「自分の書いた記事を発信することで、微力ながらも役に立てれば、と思う」。

出産、育児は女性ならではの強みに

警察担当になって半年、時間に関係ないハードな取材をこなしながら「自分の経験や仕事の幅を広げるチャンス」と思っていたところ妊娠。うれしかった反面、「仕事は続けたいが会社に迷惑をかけるのでは」と悩んだという。だが上司に報告すると「おめでとう！仕事は続けるよね、協力するから」と理解ある対応だった。「本当にホッとしました」と振り返る。現在は福祉関連の取材を担当。心に残っているのは、子育てをしながら起業した女性の取材。「挑戦する姿勢に元気をもらった。働く女性の支援制度の課題にも気付くことができた」。取材現場では、女性ならではの視点や感性を生かせる場面も多いという。「男性と全く同じように働こうと張り合うのではなく、柔軟に仕事に向き合うことが大切。出産、育児でキャリアを中断しても、その経験を強みにしていきたい」と考えている。

さまざまな経験を仕事に生かしたい

2014年3月に結婚。仕事が忙しく、ほとんど家事ができない時期もあったが、共働きの夫と協力してなんとかこなしている。「周囲の協力が欠かせないと思うが、育休復帰後には仕事と育児にしっかり向き合いたい。できる限り仕事を続けたい」という。「年齢や経験を重ね、社会とより深く関わるようになった。きっと仕事にもいい影響を与えると思う」。

プライベート

週末は食べ歩きや温泉めぐりを楽しむ。子どもの頃から音楽を続けており、現在は県内の仲間とジャマイカ音楽のバンドを組んでいる。担当はフルートとテナーサックスで、「何よりリフレッシュできる時間」という。

児玉（こだま）　奈美（なみ）さん

株式会社豊和銀行　ほうわホルトホールプラザ長

銀行初 特殊店舗の支店長

大分駅上野の森口にオープンしたホルトホール大分内にある「ほうわホルトホールプラザ」のプラザ長。豊和銀行では初の女性支店長。本部機能を持ちながら相談業務のみを扱う特殊店舗で、開設準備室の頃から係わった。2014年7月で1周年を迎えた。1990年入行。仲間や上司に恵まれ「引きあげてもらった」と重責も気負わず自然体。大分市出身。

女性の活躍推進、総合職を選択し渉外担当に

高校も短大も上野の緑深い地で過ごした。同じエリアで仕事をするなど想像だにしなかった。卒業後、豊和銀行に入行。大分駅前支店から26才の時県外支店を希望し福岡の大濠支店に1年間勤務。大道支店を経て32才で本店営業部係長に。その後、部長代理、三重支店長代理を経て本店営業部次長に昇格した。時代的に女性の活躍を推進、積極的に役職者へという流れがあった。勤務スタイルも総合職と地域限定職のいずれかを選択する新しい人事制度へ移行。上司にチャレンジしてはと勧められ総合職を選んだ。「2～3年勤めて寿退社くらいの軽い気持ちで就職した」銀行業務。総合職は渉外担当を含む、複数の職務が必須条件であったため宇佐支店へ転勤。自転車で担当地区を回り渉外の経験を積んだ。その頃立ち上がったホルトホールプラザ開設準備室に異動。開設準備室長として立ち上げに携わり、平成25年7月、女性初の支店長を拝命。

5つのサービスを個別ブースで土日祝も対応

「ほうわホルトホールプラザ」は相談業務を中心とした専門店舗。「各種ローン相談」「資産運用相談」「相続・年金相続」「保険相続」「貸金庫」の5つのサービスを個別ブースで対応する。現金取引や振込業務、税金・公共料金収納業務の取扱いはない。プラザ長以下、6名の行員とほけん110番からの出向者2名。8名の部下を束ねる。勤務は9時30分～18時30分と10時30分～19時30分の2シフト。土日祝も営業。店休日は年末年始の4日間で営業日は年間361日。変則的な勤務であることから「日常的に仕事の引き継ぎや伝達が必要。しっかりコミュニケーションを取るよう」気を配る。全員出勤日を作り、その日は懇親会を行うなど日常的な声かけを心掛ける。

相談業務は女性の力が発揮できる

通常の銀行業務とは異なり実績で何かを示すことは難しい。相談業務に特化し年中無休の利便性や親しみやすさなど会社のイメージアップを目指す。「お客さまのためになるように対応しプラザの周知の徹底や認知度を上げることがこの店舗の役割と思っています」。相談業務は女性の力が有効。支店窓口での経験からクレーム対応もこなす。「ピンチはチャンス。クレームの解決がお客さまとの良い関係のスタートにもなります」。

感謝の言葉がモチベーションアップ

知識やスキルアップすることで「お客さまの信頼を得て、感謝されたり、お礼の言葉をもらえたりする」。その喜びがモチベーションとなって更に知識やスキルアップの原動力になる。女性上司の下につくことに抵抗のある人もいるかもしれないが、意識せず自身の経験から上司としてありたい姿を目標にする。感情的にならないように穏やかな対応を心掛け、与えられた立場をしっかり務める。女性渉外研修や役職研修、インターンシップ、就職説明会等で話す機会が増えた。「良い刺激をもらえるよう心掛けている。後輩たちには仕事の中にやり甲斐を見つけ、ずっと働けるようなモチベーションを持ってほしい」。

プライベート

入行当時からの大の温泉好き。おんせん県大分のほとんどの温泉をクリアー。九州各地の温泉にも足をのばす。日帰りや1泊でゆっくり温泉に入り、食べたり飲んだりで元気をチャージ。

三宮（さんのみや）　佳子（よしこ）さん

高齢者住宅仲介センター・ウチシルベ大分　お住まい相談員

高齢者住宅等の無料相談所開設

「高齢者が安心して暮らせる住まいを提案したい」。1年前、大分で初めて開設された高齢者住宅の仲介をメインにした「ウチシルベ大分」の相談員。宅地建物取引主任者の資格を取得したのは1995年。その後父親が営む司法書士事務所の補助業務等を経て2008年「サンノミヤ不動産」を開業。2014年から高齢者住宅仲介センターに籍を置き、様々な高齢者の「住まい」の仲介をライフワークにする。

10年を節目に新たな目標にチャレンジ

10年を節目に新たな目標を掲げチャレンジしてきた。東京の短大を卒業後、OA機器インストラクター、営業アシスタントとして7年間務め大分へUターン。情報サービス会社に就職。その後、縁あって司会者派遣会社でブライダル司会を学び、プロとして活動する。10年を経て「サンノミヤ不動産」を開業した。司会業を続けながら、父親が営む司法書士事務所を手伝うことで不動産業を身近に感じた。開業して直面したのが高齢者等の住まい。一方で古いアパートの空室状況。「借りたい人と貸したい人のマッチング。高齢者の住まいを提供できないかと、この6年間、様々なケースに対応してきた」。

女性目線で格差社会の「住まい」サポート

少子高齢化社会の中で、高齢者の住まいの在り方が急激に変化している。子どもたちが自立したあとの高齢者の住み替え。家族的支援のない1人暮らしなどの住まい。保証人がたてられなかったり、施設を選択できなかったり。高齢者1人ひとりが抱える問題は多様化している。「とてもデリケートな部分なので、慎重な対応を心がけています」。住まいは一般賃貸住宅がいいのか、有料老人ホームなのか、またはグループホーム、ケアハウスなのか。たくさんの情報の中から適した住まいを提供。現地に同行し地域の支援センターや介護事業者等の協力も受ける。相談、見学、仲介料は全て無料。「気軽に訪ねてほしい」という。

「人と人の縁」を結ぶ仕事にやり甲斐

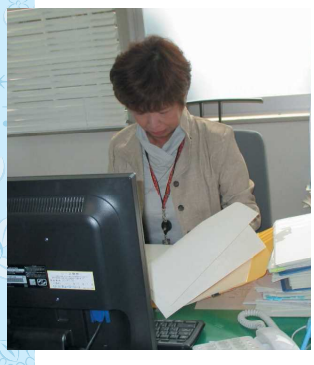
「人と人の縁」を結ぶ仕事にやり甲斐を感じてきた。30代はブライダル、40代は不動産の仲介。売買・賃貸の仲介はもちろんだが、格差社会や高齢化が急速に進むなか、女性ならではの視点での住宅サポートをライフワークに新しいビジネスの道を開く。自分の可能性を追求する「学び」が好きだ。宅地建物取引主任者の資格のほか、CADオペレーション2級、簿記2級、珠算2級。「何か社会貢献できたら」と大分キャピタルロータリークラブの活動に関わって5年。幹事も経験した。

安心の住まい通して自立への道を手助け

「高齢者住宅仲介センター・ウチシルベ大分」は、兵庫県尼崎に本部がある「くらし計画」と提携。他県とのネットワークも活用しながら、自立への道を手助けする。相談相手によっては土・日・祝日も出勤するが「忙しく働いているのが好き」という。希望する施設へは現地まで同行し納得した上で入居の手続きをとる。又、同事務所には「NPO法人住むケアおおいた」も併設されており、高齢者以外にもひとり親家庭、生活保護者など生活相談等を受け付けている。

プライベート

趣味はフラメンコと三味線。フラメンコは16年目、三味線は藤本流師範。フラメンコは2年に1回発表会があり、三味線は京都南座の舞台に立つ。「始めたらやめない性分。忙しい日々をリセットする大切な時間です」。



柴山（しばやま）　久美子（くみこ）さん

国立大学法人大分大学教育福祉科学部　事務長

工学部で学んだ知識が強み

「仕事を通して確固たる自分を持てるようになりたい」との強い思い。九州工業大学の情報工学科で学んだ知識や経験がその後の行く先々で強みとなる。九州大学勤務の頃、同僚だった夫と結婚。夫の地元である大分へ。大分大学工学部に技術職として勤務。その後、事務職へ移行。2013年11月より教育福祉科学部の事務長を務める。

「確固たる自分」を持てる仕事 目指す

福岡県京都郡苅田町出身。母は専業主婦。3人の子どもたちの学費のためにパートに出る母を見て育った。結婚や出産を経験しながらも続けていける仕事、仕事を通して確固たる自分を持ちたい。中高生の頃SF映画で見るような宇宙船のコントロールパネルや機器にカッコ良さを感じ興味を持ち、九州工業大学の情報工学科に進学。卒業後は九州大学の大型計算機センターに技術職として５年間勤務。同僚として九大に勤務する夫と知り合い結婚。夫の地元である大分へ移住することになり、大分大学工学部の電気工学科の技術職として転勤。学生の指導などに4～5年携わった。その後もっと広く大学全体を見渡せる仕事をしたいと思い技術職から事務職へ異動を申し出た。事務部門のシステム充実を検討するタイミングであったため、その分野に知識のある柴山さんに白羽の矢があたる。

技術職から事務職へ組織改革にやり甲斐

事務職に異動して14年後、大学はホームページや広報活動を展開。事務局で広報担当を4年。ホームページのシステムは技術系の知識を生かせ、広報誌等では今までと違った出会いが大学内外にあり、全体を見る目が養えた。その後、総務企画課副課長に昇格。新しい役職登用制度が出来、課長任用試験にチャレンジして合格。社会連携推進課長（3年）、企画課長（半年）を歴任し、2013年11月より教育福祉科学部の事務長を務める。学部事務の統括及び責任者としての職務。大学全体として、現在組織改革の検討時期で「大変やり甲斐のある仕事」と熱意を傾ける。来年度定年を迎えるので「最後の職となると思う」と爽やかな笑顔。

役職者へのチャレンジとなる任用試験

現在の事務職の同職位の女性は22名中3名。係長まではそこそこの人数がいるが次の副課長の壁は高いようでチャレンジする女性は少ない。「私は何かとタイミング良く運がついているのよ」と謙遜するが、新しい仕事や立場も楽しみながらチャレンジ。爽やかな笑顔で乗り切ってきた。事務長としての立場上、考えることは多いが、自分だけの独断にならないよう周りの声に耳を傾けるようにしている。役職者へのチャレンジとなる任用試験は上位職になるほどポストが少ないが「女子職員にはチャレンジして後に続いてほしい。これをやらせたら誰にも負けないという強みや自信をつけて仕事に生かしてほしい」と伝える。

生後2ヵ月で保育園に預け復職

子ども2人を出産した時は現在のような手厚い産休・育休制度がなく産前6週間、産後8週間。生後約2ヵ月で保育園に預けて復職。実家は北九州、夫の実家も市内でなく頼れる親が身近にいなかったが丈夫な子どもで手がかからなかった。何かの時には、近くにいた夫の姉に助けられた。制度は今とは比較出来ないほど短かったが、夫も育児には協力的だったり、周囲の理解もあり、感謝している。

プライベート

ものすごい凝り性。仕事を始めた頃はバドミントン。40才くらいからテニスに熱中。ここ10年はゴルフを始め、週末は夫と一緒に楽しむ。いつかは海外へも…と計画中だ。

菅本（すがもと）　夕子（ゆうこ）さん

一般財団法人大分市高崎山管理公社　案内ガイド担当

経験を重ね仕事にやり甲斐

野生の猿の生態が観察できる全国でも珍しい高崎山自然公園。1993年市観光協会に就職。配属されたのが高崎山。女性ガイド初として地元テレビ局などマスコミ等の取材で注目。その後、入園受付や庶務、山中での対応など様々な部署で経験を重ね、2年前、再びガイド担当になった。「この仕事の楽しさや、やり甲斐を感じています」と若々しい笑顔。出身は大分市。

初の女性ガイドで注目

最初に案内ガイド役に配置されてから22年。当初はスタッフが30数名いたが女性の先輩は少なく、周りは父親世代の男性ばかり。マニュアル的なものはなく、戸惑うことが多かった。猿は女性や子ども、弱そうな人を見る。「最初はいきなり飛び蹴りされたり、こわい目にも遭った」と菅本さん。サル寄せ場と違い山の中では猿は野性に戻る。生半可な気持ちや態度では猿になめられてしまう。「本気で猿を追うくらい声を出し、ノドがつぶれるくらいやった。自分でもビックリするくらい大きな声で猿を追うことが出来るようになった」と笑う。

山中では野性に戻る猿と近隣農家の対応

女性ガイドとしてスタートしたあとチケット売場や入園受付へ異動。市内はもとより県外からも来園する観光客を気持ちよく迎え、楽しんで帰ってもらえるよう見送りは最高の笑顔を心がけた。その後、庶務事務を担当。2011年6月から保全係に異動。山中での観察や、近隣農家の対応、猿追いを2年。農家が栽培する作物に被害が出ないように電流を通した柵を配しているが、いのししが突きやぶった穴から猿が逃げ出すこともある。「迷惑をかけ、お詫びに行くこともあります。高崎山は国立公園なので木の枝1本切ることも勝手に出来ず、届出を出したり承諾をもらったり大変です」。山中では自然保護の大切さを学んだ。

猿はどの子も可愛いが一線を置いて接する

2013年4月から案内担当としてガイドに復帰。猿人口は約1500頭。広場にいる猿たちの特徴や顔写真の入ったノートをいつも持ち歩き、繰り返し確認して覚えるようにしている。ガイドとして重要なメンバーは覚えている。毎日接していると猿たちはどの子もかわいい。だが動物園のように飼育しているわけではない。「あえて慣れずに一線を置いて猿達と接するようにしている。それが野性とのつき合い方」。

経験を積み、出前授業や講演も

一時期現場を離れたが、入園受付では客とのコミュニケーションで仕事の楽しさを味わった。山中での体験も含め全ての部署の仕事をすることで全体が見えてきた。「年を重ねて経験を積むことで仕事に幅や深みが出てくると思う。若かった頃に比べてお客様の対応も柔軟に出来るようになった」と菅本さん。2013年は「ベンツ」人気でブレイクした。「ベンツ」は毎日スタッフが交代で書いている「スタッフブログ」の何気ない一言で始った。来園する客に喜んでもらえるイベントや企画にも取り組む。現在、スタッフ11名中女性4名。案内は男性3名と女性ガイド2名。小学校の出前授業や体験学習、企業や敬老会等から依頼される講演では「ベンツ」のことや、猿に学ぶオスのタテ社会などをテーマに話す。「皆さんに高崎山の猿のことをもっと知ってもらい、猿たちのことをもっと好きになってもらえたら、と思っています」。

プライベート

自宅で読書が良い気分転換。推理小説はもちろん話題の本等ジャンルは選ばない。土いじりや野菜づくりにも興味を持つようになった。休日はもっぱら野菜たっぷりカレーづくりでストレス解消。最近、人間の男性よりオスザルがかっこよく見えるのが悩み？

大海（だいかい）　くりこさん

姫島村社会福祉協議会　姫島村高齢者生活福祉センター「姫寿苑」介護職員

故郷に戻り福祉の道選ぶ

姫島のフェリーのりばから歩いて5～6分。高齢者生活福祉センター「姫寿苑」の介護職員として働くようになって4年。島で暮らす皆んなが親戚のような土地柄。助け合いの精神が働きやすい環境をつくり、3人の子育てをしながら高齢者には実の祖父母のように接する。エステティシャンとして働いていた頃には考えられない穏やかでゆっくりとした時間。「島に帰って来てよかったです」。

実の祖父母のように介護にあたる

高校卒業後、都会に憧れエステティシャンの専門学校に入学。国際ライセンスを取得しエステティシャンとして福岡等の支店に勤務。東京暮らしも経験。その後、出身地の姫島に戻る。「戻って来て故郷の良さを改めて知りました」。就職先は前職とは異なる介護職。縁あって社会福祉協議会に勤務。2010年から「姫寿苑」で高齢者の介護にあたる。働きながらヘルパー2級の資格取得に中津まで2ヵ月通う。実技体験もあり介護の基本を学ぶ。「姫寿苑」はデイサービスと居住者の介護と支援。デイサービスは風呂に入るのを楽しみに来る方が多いそうで、実の祖父母のような年齢の高齢者から「寮母さん」と頼りにされている。

働きやすい環境、助け合い精神

高齢者が日帰りで利用できるデイサービスが担当の大海さん。勤務は8時30分から17時15分。「姫寿苑」の近くには保育園や小学校があり、自宅もすぐそば。「何かあった時にはすぐに対応できる距離で助かります」。職場のサポート体制も充実。助け合いの精神は姫島ならでは。実は姫島には「大海(おおみ)」という地名があり、大海地区は「大海」という名字の家が99%近くという。地域皆んなが家族や親戚のような土地の風土、海や山の自然が気持ちを豊かにしてくれる。デイサービスに訪れる高齢者には笑顔を心がけ、やさしい口調で接する。入浴やリハビリだけではなく、楽しみながら過ごせるアイデアや行事にも取り組む。月１回行われる職員会議では研修発表があり現場の声が反映される。

将来は介護福祉士にチャレンジ

知り合いも多く気がねする入所者には名前で呼びかけながら娘のような気持ちで接するが「馴れ合いにならないように気をつけています」。介護が必要になっても「いつまでもきれいでいたい」と思う高齢者に、エステティシャンの資格を持つ大海さんの腕が発揮できる日も。顔や手などマッサージすることで気分が和らぎ癒されると思う。いまは時間がとれないが、介護福祉士の資格取得にチャレンジしたいと将来を見据える。

子どもの学校行事は積極的に参加

職場と生活圏が近いことが働きやすい環境を作っているが、3人目の子どもは1才半から保育所に預けて働いた。一緒に過ごす時間が少ない分、休日は目いっぱい愛情を注ぐ。子どもたちには家でも外でも同じように接し、学校の行事を最優先にし夫と一緒に積極的に参加する。「日々、楽しいことを見つけたい」。2013年、日本ジオパークに認定された姫島。「長女が自慢にしていることがうれしい」。子どもたちの学びの場ともなる姫島で、介護の仕事に就けたことが「幸せです」。

プライベート

映画が好きで、温泉も好き。映画を観に行くことも多かったが、今は子どもと一緒に過ごすことが多い。３人の子どもが「何よりも宝です」。

田口（たぐち）　有子（なおこ）さん

御菓子司「讃州堂」　和菓子職人

伝統を守り新作もチャレンジ

中学生の頃バブル崩壊。就職時は氷河期。自分を生かせるよう手に職をつけるため、大阪あべの辻製菓専門学校に進み和菓子職人の道を志す。卒業後は明石の和菓子店に7年勤め修業を積み、地元（杵築市）にUターン。30代を前に縁あって別府の讃州堂に勤め現在8年目。職人歴15年。

モノ作りが好きで和菓子職人の道志す

子どもの頃から、母がパンやジャム、洋服など何でも手作りしてしまう姿を見て育ち、自身もモノ作りが大好き。大学進学を考えた頃は就職氷河期で手に職を、と菓子職人の道を選ぶ。大阪あべの辻製菓専門学校に入学。実習の中で大きなオーブンの上の段に手が届かない小柄な体格や、乳製品たっぷりの洋菓子より、自分の好みは和菓子に向いていると考え和菓子の道を目指す。パティシエを志望する女性がほとんどだった。卒業後は明石の和菓子店で7年間修業しUターン。別府の和菓子店「讃州堂」に職人として就職。家族経営ならではのアットホームな職場環境のなか、季節の上生菓子に繊細な技術や女性ならではの感性を発揮する。1年のピークは秋から春まで。年中行事や季節折々の歳時で忙しい。夏は中学校の要請で職業体験学習を受け入れた。

菓子作りは力仕事　30kgの重さも平気

讃州堂は職人歴30年を超えるご主人と跡取りの息子さんと田口さんの3人の職人が働く。田口さんは主に季節の上生菓子作りを担当。和菓子ならではの細い手先の作業もあるが、準備のあんを練る工程は力が必要だし、熱い。せいろもかなりの重さで材料を運んだり…の力仕事が多く、重労働。小柄な身体のどこに力を秘めているのかと思うほどパワフルで明るく元気。今では「30kgの重さも平気」だ。通常の勤務は7時から16時だが、納品時間や作り置き出来ない商品など状況によっては早朝の5時くらいから作業に入る。何よりもモノ作りが好きで選んだこの仕事。「職人の道を選んで正解だった。長く続けていきたい」。

季節の上生菓子作りに女性ならではの感性発揮

和菓子は伝統の技があるが、新商品の開発にも熱心。サンタクロース、おひなさま、こいのぼり、バレンタインのハート型の上生菓子等々、女性ならではの若い感性の新しい創作上生菓子が好評だ。接客をしながらお客さんの生の声がありがたい。2014年7月に結婚。結婚式では自分の作った和菓子でもてなした。入刀は上生菓子で作った原寸大の鯛、引き出物も手作りの菓子。仕事の技を応用して自分のブーケ、母親に贈る花束、ウェルカムボードも粘土細工で作成した。

和菓子職人歴15年、新しい分野開拓

店の女将さんは人生の先輩。何かと相談にのってくれるのも力強い。4月出産予定で2月くらいまで勤務し、出産後は育休をとって職場復帰する予定。保育園の情報も知り合いを通して探している。大好きな和菓子作り。母となった立場で、違った目線や考え方で仕事ができるのが楽しみ。「お客さんに喜んでもらえるような美味しく、目にも楽しめるお菓子作り。新しい分野も開拓したい」。職人歴15年のこれからの課題だ。

プライベート

最近お気に入りのマカロンケース（小物入）や粘土細工などの手芸。プレゼントするのも楽しみ。読書好きでジャンルはこだわらないが海堂尊の「チームバチスタ」シリーズは特にお気に入り。

田崎（たさき）　江梨香（えりか）さん

九州電力株式会社新大分発電所建設所　技術グループ

火力発電部門を希望して就職

中高時代は数学の先生になりたかったが大学は九州を離れ工学部の電気電子工学科に進む。電気は危険であったり難しい内容ではあるが人々の生活には欠かせないものであり、この電気分野を通じて社会に貢献したいと思い卒業後の道として選択。出身は佐賀県。地元を離れたことで九州の良さを思い知り、九州電力に就職。2010年入社、九州の火力発電所や海外のIPP事業等、幅広い業務を経験できる火力発電部門を希望。北九州の新小倉発電所勤務を経て、2013年8月から新大分発電所建設所に勤務。

前任地、大分でも職場唯一の技術女性

「生活のライフラインとして重要な電気を通じて社会、特に地元に貢献できる仕事をしたい」。2009年5月、内定時に希望したのは火力発電部門、翌年入社。同期約350名中、技術系の女性は4名。入社後は福岡の社員研修所で約1ヵ月半、発電の基礎知識を学び、北九州の新小倉発電所に唯一の女性として配属、運転業務に従事。三交替勤務で3年間、発電設備のオペレーションや現場で実際にバルブ操作をしたり設備の異常の有無を確認するパトローラ業務を経験した。夜勤は午後11時～翌朝8時。途中2時間の休憩がある。赴任前に女性用の更衣室や休憩室等、環境整備をしてくれ「ありがたかった」。新大分発電所に転勤になったのは2013年8月。2016年に竣工予定の発電設備増設に携わる建設所技術グループに所属。ここでも唯一の女性だ。

増設中の新大分発電所勤務に感激

技術系は何年やっても勉強することが多くゴールはないが「一人前と言われるよう頑張って成長したい」。今回、発電設備増設中の新大分発電所建設所への配置を「なかなか経験できないこと。貴重な勤務チャンスを得た」と感激。技術系女性が少ないことから、会社は「ダイバーシティ推進グループ」を立ち上げ女性の活躍をサポートしている。失敗したり、仕事がうまくいかず1人で悩んで考え込んだりしたが、コミュニケーションをとれば男性、女性の関係なく同じ職場のメンバーが支えてくれることに気付き、気軽に相談できるようになった。

電気を通じて地域に貢献したい

九州は９ヵ所の火力発電所があるが、初任地の新小倉発電所と現在の新大分発電所はＬＮＧ（液化天然ガス）を燃料としている。その他にも石炭や石油を燃料とした発電所も経験してみたいという。発電部門での電気業務は大きく分けると発電機その他電動機を扱う電気係と、発電設備を自動で運転させるためのコンピュータ制御を扱う制御係に分けられる。今、従事している制御業務を「しっかり経験を積んでこの道を極めたい」。入社動機である電気を通じて地域に貢献出来るよう「自分なりにこれからも頑張りたい」。

入社５年目、納得いくまで頑張る

現在の勤務時間は8時50分から17時30分だがメーカーや協力会社とのやり取り、締切りの関係で残業も少なくない。福岡の本店で設計されたものが実際に発電所の中でどうなのか、設計図を既存の設備と比較確認を行なったり、メーカーとのやり取りが主な仕事。九州電力全体で約1万3千人。そのうち技術系女性社員は1％未満。技術系は協力会社もメーカーもほぼ男性社会。入社当初も現在も女性不在だが「女性が1人は覚悟していたこともあり、あまり苦労や困ったとかの記憶はない。逆に周りの男性たちが勝手が違ってやりづらかったのでは」と思う。今はまだ入社5年目。先輩の経験談やアドバイスを聞いたり、相談したりしながら自分でやれるだけやってみて、納得いくまで頑張ることを心掛けている。

プライベート

転勤族で同僚に女性がいないこともあって休日はひとりでドライブ。土・日は足をのばして佐賀関や別府へ。沿線の気になった店に立ち寄ったり景色を楽しみながら気分転換。

田中（たなか）　美智代（みちよ）さん

お菓子屋さん　「maruju」代表

夢を持ちつづけ念願の店オープン

菓子職人の父と店を切り盛りする母を見て育った。小豆の煮える香しい甘い匂いが原体験。短大を卒業後、地元の銀行に就職。結婚後、子育て中に菓子作りの思いがふくらみ菓子やパン教室に通う。自分の店を持ちたいという夢がかなったのは2013年。自宅のテラス部分に3坪弱の店舗「マルジュ」をオープン。「子どものお小遣いで買いに来れるようなおやつ屋さん」を実現した。

実家は製菓業、菓子作りの楽しさ知る

生まれたのは香々地町の「まるじゅう製菓」。4人兄弟の長女。小さい頃から工場で働く両親を見て育ち、子どもながら菓子づくりの楽しさを知った。将来「製菓の専門学校に行きたい」との思いはあったが、苦労させたくないという親の思いをくみ断念。短大卒業後、地元の銀行に就職。23才で職場結婚し退職。菓子作りの思いは子どもを持ったことで強く意識した。自分が子どもの頃のおいしい手作りの菓子の思い出を、生まれた子どもにも味わせたい。一念発起、夫を説得。やっと首がすわった生後2ヵ月の子どもをおんぶして亀川まで菓子やパン教室に7年間通い、その後、自分でお菓子・料理教室を開設した。

結婚後芽生えた菓子作りの思い実行

教室を開設して10年。毎年、自分の店を持ちたいという気持がピークになるたびに夫に夢を語っていたが、夫の冷静な判断でなかなかゴーサインは出なかった。2年前の秋。コンビニスイーツのブームになったことから「自分のためにひとつからでも気軽に買える手頃な値段のお菓子、近所のおやつ屋さんをやりたい」と伝えたところ、ついに夫が賛成。一気にお店オープンへ向ってスタートした。子どもたちも背中を押してくれたが高3、中3の2人の娘は受験を控えていたため春以降に本格的に準備。ケーキ屋で修業させてもらいながら2013年10月に開店。「子どもたちもお店も皆んなピカピカの1年生。頑張ろうとそれぞれ新生活をスタートさせた」。自宅1階のテラスだった場所に3坪弱の小さな店舗。1周年を迎えて今は基本の菓子の他、忙しいお母さんが家で子どもと手作り菓子が出来るようクッキー生地を販売することも始めた。

女性が働くことに理解ある夫

店の定休日は毎週水曜と日曜祝日。何かと家のことが手抜きになることもあるが「好きなことをさせてもらっているという負い目もあり、家のことはちゃんとやろう」と努力。夫は両親が共働きだったことから、女性が働くことに理解があり支えてくれる。きついことやストレスはオープンに話し、ためないように、頑張り過ぎないように心掛けている。「何よりも好きなことが出来ているから満足」。子どもたちには好きなことが仕事になっている今の姿を見て、それぞれ進む路を見つけてほしい。

夢を持ちつづけ目標に向って努力

お菓子づくりをあきらめず思い実現した田中さん。「何かをスタートするのに年齢や時期は関係ない。夢を持ちつづけて目標に向かって努力することが大切だと思う」。その目標は胸に秘めておかず、家族や周りの人に伝えたり、口に出すことによって道は開ける。有言実行。あえてつらい立場に自分を追い込み、やらないとカッコ悪いという意地も芽生えた。これからも子どもが小遣いで1人で買いに来れる「身近なおやつ屋さんでありたい」。そして、公民館での料理教室など地域に溶けこんだ活動をしたい。次の10年は食堂を営んでいた祖母の影響で「料理で皆んなを笑顔にしたい」と夢はまだまだふくらむ。

プライベート　息抜きは作業しながら店を手伝ってくれている義妹や友達とのおしゃべり。

千葉（ちば）　歩美（あゆみ）さん

宇佐市消防本部　消防課救急係　救急救命士

宇佐市で初の女性消防士

別府市出身。3人兄弟の末っ子。年の離れた兄2人が消防士だったことから物心がついた頃から憧れ目指す。救急救命士の資格を取得し、2012年に宇佐市消防本部に採用。宇佐市では初の女性消防士。消防学校で基本訓練を学び消防係に配属。火事現場での消火活動も経験。2014年4月から救急隊に異動。24時間勤務の厳しい激務も「人の役に立ちたい」と、救急隊員として任務にあたる。

兄2人の消防士を誇りに救急救命士を目指す

年の離れた2人の兄と一緒に男の子っぽく育った。物心ついた頃から消防士の兄たちを誇らしく思い、自らも消防士になって人の役に立ちたいと思うようになった。進路指導の先生は女性であることから看護師を勧めたが、救急救命士の意思は強く兄2人も「頑張れ」と背中を押してくれ、両親も賛成してくれた。専門学校を卒業、国家資格を取得。女性の採用枠があった宇佐市を受験し、採用に至った。採用後すぐに大分県全域から新入消防士が集められ基本訓練を学ぶ消防学校で女性は2人。「お互いに励まし合いながら心強く頑張れた」。半年間の消防学校を卒業後、消防係に配属。重いホースを抱えて火事現場での消火活動も経験した。3年目の2014年4月から救急隊に異動、救急隊員として任務にあたる。

救急隊員として24時間勤務

救急隊員の勤務は3日間で1サイクル。8時30分～8時30分までの24時間勤務。勤務明けの日は非番で特に何もなければ帰宅。3日目は休日でこのサイクルを繰り返す。勤務日は状況により2～3時間仮眠をとることもある。1チームごとに隊長と機関員（救急車の運転）と隊員の3人構成。救急車で搬送中は救急救命士としてはもちろん、不安な傷病者に対して声かけや励ましを心掛ける。消防係の時は装備が10kg以上あり、放水ホースを支えるのもかなり力を必要とした。女性消防士の受け入れで、署では女性専用の更衣室や仮眠施設を整備。ソフト面ではセクハラやパワハラの研修が署内で何度も行われ「その受入体制を感謝すると共にがんばらねばと意を強くしました」。期待に応えられる努力をすると共に、家で筋トレに励み、体力をつける。

救急要請に女性ならではの特性生かしたい

救急要請は千差万別。様々な事例があり多くの経験を積むことが求められる。力では男性に敵わないが、女性ならではの特性を生かしたやり方もあると思う。母性や心配り、気遣い。声かけの際、女性の声で落ち着いてくれたり緊張を和らげたりすることも。「子ども連れのお母さんが心強く思ってくれることもあります」。大分県内で女性消防士は10数名しかいない。年に1回は集まる機会があり、結婚、出産を経た先輩の話、仕事の悩みや相談にのってもらえるのが楽しみ。

健康管理大切に長く続けたい

社会見学に来た小学生から「女の人もいるんですね」「自分もやってみたい」など憧れの仕事だと手紙をもらったりする。「少しでも参考になったりするのはうれしい」。職場では男性上司や同僚と気がねなく話しオープンに接するように心掛けている。自分らしく気をつかわずに相談もする。何よりも自分自身の健康管理が大切。毎日、元気でいられるよう気をつける。子どもの頃から憧れて実現できた仕事なので長く続けたい。

プライベート

体力作りや筋肉トレーニングのほか、最近は料理作りに凝っている。料理をしていると楽しくてストレス発散になる。実家で三兄弟が揃うと仕事の話ができることも心強い。

手島（てしま）　志穂（しほ）さん
大分県農林水産部森林保全課
林地保全班　主査

数少ない女性技術職として

宇佐市出身ながら父の仕事の関係で種子島の自然の中で育つ。農学部に学び地元で働くことを考え公務員の技術職を選ぶ。1998年県職員に採用。本庁勤務を振り出しに日田地方振興局（現西部振興局）、日田林業試験場（現・林業研究部）に初めての女性森林土木技術職として着任し、第1子も日田で出産。今春から森林保全課に配属され、保安林の許認可業務に携わる。

高1までの10年間自然豊かな種子島で過す

父親の仕事の関係で小学校に上る前から高校1年までの10年間を種子島で過ごす。自然の中で野山を駆け回って育った根っからのお転婆でのびのびと育つ。大学は農学部に進み森林の微生物など環境面を学ぶ。技術職を仕事に選び1998年に県職員採用。全体の採用は約100名。林業の同期女性は3名で、全員で8名になった。現在、林業部門は200名弱、女性も30名以上になった。「林業は狭い部門ではあるが、色んな仕事があって、色んな部門で経験を積むことが出来た」と手島さん。

初めての現場は日田の森林保全

最初の現場は日田地方振興局（現西部振興局）。木材振興や森林育成、森林の維持等の治山事業、自然環境保全など林業の仕事は多岐にわたる。男性職場なので制服やカッパ、長靴など男性サイズしかなく「借物のようにブカブカだった。事務所で初めての女性なので周りが気をつかってくれ恐縮した」と手島さん。現場勤務の時は山道の運転や冬山等の怖さも知った。その後3つの振興局に勤務。今春から森林保全課に配属され、保安林の許認可業務に携わり、少し現場を離れた。現在16年目。林業の主要部門である木材と椎茸についても今後その部門に配属されたら「しっかり勉強したい」と力強い。

働き続けることで得た信頼　「女性の会」懇親会

現在、林業の直属の上司に女性はいないが、林業女子の会があり年に数度懇親会を開き情報交換をしている。困ったことや悩んだ時は相談したり、アドバイスをもらえるネットワークだ。制度があってもその制度を利用出来る職場の理解や雰囲気作りが大切だと感じる。「現在の職場は大変風通しがよくありがたいと思う」。様々な部署で経験を積み、幅広い知識を身につけることが出来た。「現場での人のネットワークは何よりの財産」。働き続けることで得た経験や信頼をこれからは少しでも役立てたい。人事課が主となり次世代の働き方を等について考える「大分特定事業主行動計画」策定プロジェクトチームに参加。男女、各職種から召集された12名のメンバーで定期的に打合わせを行っている。

優先順位を決めて仕事と家庭両立

第1子妊娠中に日田の現場で体調を崩す。国東勤務の時は大分市内からの長距離通勤も経験。今夏は子どもが急病で2週間入院。朝は病院から通勤するなど夫と交代で乗り切ったが、子どもが退院後、2人ともダウンした。10才から3才まで子どもは3人。6年前に夫の実家の近くに家を建て、育児は両親がサポート。夫は仕事も理解してくれ料理以外の家事や育児をこなす育メン。出来る範囲の許容量で「優先順位を決めて取捨選択をしないと長続きは出来ない」。周りを頼ることもできるようになった。職場でも同僚や上司に家のことをオープンに話し状況をわかってもらえるようにコミュニケーションをしっかりとっている。

プライベート

休日は子どもに向き合うように心がけキャンプによく出かける。野外では家族がちゃんと向かい合って話したり1つのことを一緒に出来る。バーベキューや青空の下でのビールは最高！長女のミニバスケットボールの試合や練習にも駆り出される。頑張りっぱなしではなく、今を見直して働き方のギアを変えていけるようになれば最後まで“完走”できるようになるとつくづく感じる。

友永（ともなが）　貴子（たかこ）さん

萱島酒造有限会社　蔵人

理系好き生かし酒質の科学分析

国東町にある萱島酒造は明治6年創業、明治末より大正期にかけて建てられた酒蔵は今も現役。広島の大学（生物生産学部）を卒業後入社。日本酒のアルコールや酸度を測定し分析する蔵人になって18年になる。酒造りは10月から冬場がシーズン。「日々、成長し酒になる課程に関わる仕事は楽しい」。酒造りは泊まり込みになる日も多く男の職場とされてきたが、酒造りの魅力にどっぷり。

酒造りの現場では唯一の女性

生まれは別府市。理系が好きで大学は生物生産学部を志望。食品コースで微生物や細胞について学ぶ。卒業後、広島の食品メーカーに1年程勤めUターン。縁あって国東町にある「萱島酒造」に勤務。学んだことが生かせる職場で日本酒のアルコールや酸度の測定、もろみの分析等をする蔵人としての生活が1996年スタートした。酒造りの期間は10月から翌年4月まで。米を洗い・蒸し・麹をつくり・仕込むといった基本的な作業だけではなく、蔵の湿度や温度の調整など酒造りに携わる職人を「蔵人（くらびと）」と呼ぶ。瓶詰めやラベル貼りには女性がいるが、酒造りの現場では初めての女性。シーズン中は杜氏のもと品質を追求する分析に昼夜、没頭する。仕事場は、まるで理科の実験室のよう。

仕込みは冬場、酒質を分析し旨さ追求

萱島酒造では10月8日にその年の酒造りの成功と安全を祈願する神事があり、9日に蔵入り。仕込みが始った。寒さの厳しい冬場が繁忙を極める。麹の酵素力を調べるもろみの分析、酒質を分析するアルコールや酸度の測定。気温によっても微妙に変化する酒質を純米酒、醸造酒、吟醸酒など各種類ごと分析する。「もろみが酒になるまで約20日。日々、泡が違ってくる。成長しているんですね。生きている、を実感します」。分析の結果は杜氏に報告し、伝統の手造り酒法から生まれる、清酒本来の良さを追求する。アルコール濃度を算出する迅速アルコール測定器の導入で「ずいぶん分析が楽になりました」。

仕込み期間は泊まり込みも

仕込みの期間中、勤務時間は変則で4日に1度は泊まり込みになるため、プライベートな時間はもちにくい。麹、酵母、もろみ…酒造りにすべてを集中するこの時期、杜氏、蔵人は朝昼夜と同じ釜の飯を食い…という男の世界だった。「女性1人は覚悟の上だったので、特に戸惑うことはなかった。先輩の男性の皆さん方が気遣ってくれて大変だったのでは」。分析室は当然のこと冷暖房なし。アルコール測定器とにらめっこしながら終日分析に追われる。まるで理科の実験室のような居心地の良さ。明治末より大正期にかけて建てられた酒蔵は文化庁の登録文化財。時を経て今なお現役の酒蔵が働く職場。蔵人は20人弱。のどかな田園が広がる。仕込み中は忙しいので、ほとんど「プライベートの時間はありません」。

夏休みは2ヵ月、海外旅行楽しむ

酒の仕込み中は忙しいが、夏は「代休をもらえます」と笑う。7～8月の2ヵ月間はヨーロッパ並みの夏期休暇を満喫。「一生懸命働いた自分へのごほうび」。仕込み中はお金を使うこともなく、貯めたお金で海外旅行を楽しむ。2014年は母と一緒にアメリカへ。過去、フランスやカナダ、トルコへも。文化の異なる国へ旅して、その国のお酒に触れる。日本酒は海外からのニーズが高い。「日本酒の旨さを知ってもらうため」の新たな企業努力にも携わっていきたいと思う。

プライベート

長い夏休みの海外旅行でリフレッシュ。別府の実家に帰って友人と食事に行ったり。お酒はいける方で「少々、飲みます」。

吐合（はきあい）　紀子（のりこ）さん

社会福祉法人みずほ厚生センター　さぽーとセンター風車　相談支援専門員

経験を重ね仕事にやり甲斐

芸術大学で織りや染め、彫金等の工芸を学ぶ。地元大分では養護学校に勤務。その後、障害者施設等に勤務。2005年4月から出身地・臼杵の社会福祉法人みずほ厚生センター・居宅障害児者相談部門のさぽーとセンター「風車」の相談支援専門員になって10年目。通常の相談支援のほか障がいのある人達が生み出したアートを、地域社会の中で発表していく「元気のでるアート！」を企画。県内公共施設等で巡回展を開催している。

障がいがあってもすばらしいアートを生み出す

「風車」では、よろず相談的な「一般相談」と介護サービスのケアマネージャーと同じような障がい児者のサービス等利用計画作成等を行う「特定相談」を市から受託、相談員4名体制で対応。障がい児者アートは美術教師として勤めた養護学校で「繊細でハッとするような絵を描く生徒がいておどろき、衝撃を受けた」ことが原点にある。障がいがあってもすばらしいアートを生み出す、光る原石に出会えることが楽しみ。そして何よりもまず絵を通して感じてもらいたいという思いが強い。障がい者はなかなか人から評価されたり、ほめられたりする機会がない。作家として作品を発表するようになった方々が自分に自信を持てるようになり、人とのつながりがひろがったり、表現力が増していく変化がうれしい。

「元気のでるアート！」巡回展を企画

本来の職務とは異なる「元気のでるアート！」を仕掛け、県内各施設で巡回展を開いて2014年で10回目。2014年は大分空港ターミナルやアートプラザ等で開催された。実施にあたって実行委員会は作家さん達で構成。事務局をさぽーとセンター風車が務めスタッフが協力しながら対応する。県も後押ししてくれるなど少しずつ環境も改善してきた。また県下12事業所で、障がい者アートの取り組みについて研修会を実施。「点から線へ広がって面になるような活動ベースになると思う」と吐合さん。そして「すばらしい作品をより多くの人に知ってもらいたい。アートを通して新しい出会いの場が生まれ、ワクワクします」。

福祉の道を決意「繋っていたい」

当初から福祉を目指していたわけではない。美術教師、婦人服メーカーや画廊勤務を経て養護学校（支援学校）に勤めた時の体験が大きい。子どもたちが卒業後どうするかというところから福祉に深く関わった。卒業したあとも繋っていたいという思いを強くし、福祉施設に5年間勤め「福祉の道」へ進むことを決意した。同じ仕事や職場でなくても出会った人達に助けられ支えられて「今ここにいることに感謝です」。職場では感謝の心を忘れず「ごめんなさい」「ありがとう」を大切にしている。障がい者アートは本来の職務とは別で、本筋ではないのに法人の理解もあり、2014年はアート専任スタッフをパートで雇用してもらった。

常に前向きでパワフル

基本的には前向きに楽天的に考えるタイプで「チャレンジと即実行」とパワフル。小さい子どもを抱えての就職も両親の協力で実家で見てもらえ、安心して仕事が出来た。夫の姉も保育園の迎えや夕食など面倒を見てくれた。周囲のみんなに「感謝です」。自己嫌悪とストレスは全くないとか。若い頃から少しの時間を見つけては沖縄や離島へダイビングに出かけた。いつか時間が出来たら海外のダイビングスポットへ出かけたい。

プライベート

海が身近な臼杵で育ったこともあり海に潜ったり、泳いだり、海に行くのも好き。 子どもの頃テレビアニメ「ジャングル大帝」で見たキリマンジャロの雪を見にアフリカを訪ねたい。

平川（ひらかわ）　加奈江（かなえ）さん

株式会社シンシアリー　代表取締役

障がい者の就労支援を志す

障がい者が働く障害者就労継続支援A型事業所「えくぼ」を2013年1月に設立。自動車部品を製作する事業所の管理者兼サービス管理責任者。日田市で父親が経営する財津製作所を結婚を機に手伝うようになった。ある日、知的ハンディのある子どもを働かせてもらえないかと夫を亡くした母親が訪ねて来たのが障がい者の就労に取り組むきっかけ。その指導の経験から「障がいを持った人が働ける場を作りたい」と決心。現在、利用者の仕事はもちろん、日常生活もサポート。

仕事をするとは？からのスタート

一番最初に財津製作所で受け入れた障がいを持った青年の支援から「障がい者は支援があれば働ける。働ける場所を作りたい」という思いを駆り立てた。障害者就労継続支援A型事業所は、労働基準法を適用し障がい者を雇用するので、給料をきちんと支給するには会社として成り立っていかなければならない。金属加工業としての自動車部品の品質基準は、ハードルが高い。1mmの100分の1の誤差でも不良になる。自動車メーカーは在庫を持たない生産体制。不良の発生は生産ラインを止める危険性があり、信頼を失うと同時に仕事も失う。障がい者が作ることでさえ品質に不安とハンデになる。信頼を得るためには自からよりハードルをあげなければならない。県の補助制度を活用して、高度な検査機を導入。厳しい品質管理を行っているとアピールポイントになり「取り引き先から新たな商品を受注。設備的な環境を整えることでカバー出来た。どうしたらやれるか、クリアーする方法を常に考えて前進してきた」と平川さん。

仕事以外に日常生活もサポート

企業の中に障害者就労継続支援A型事業所を作るところが多いが、自動車部品の加工を行うことから、品質や生産管理が厳しいため、あえて敷地内に別会社「シンシアリー」をつくった。スタッフは8名。事業所の利用者は19名。新しい設備導入や工場増設の際には公的機関の関係者から補助金や支援のアドバイスをもらえた。「志があれば多くの方がノウハウを教えてくれたりして助けてくれた。スタッフにも恵まれ、周りの協力があってここまでやってこれた。ハード面の充実はもちろんだが、ソフト面の福利厚生にも力を入れる。陸上部を創設し日田以外の地区へ練習に休日参加。地元でプールやジムでウェイトトレーニングしたり、仕事だけでなく休日の楽しみ方等をサポート。運動が苦手な方には和太鼓の会を検討中だ。

NPO法人障害児支援の会「ぱれっと」設立

会社設立を賛成してくれた夫は、家事にも協力的で見守ってくれている。結婚して25年。夫の実家に同居し農業の手伝いもする。3人の子どものうち1人はハンディを持って生まれた。数名の保護者とNPO法人障害児支援の会「ぱれっと」を設立。日田市から委託を受け行っている療育事業は、子ども達の特性を理解しニーズに合わせ、充実した社会生活を送れるよう行っている。専門的な資格を持った先生方がいるからこそできる事と感謝している。元気でじっとしていられないタイプで「まだまだパワーアップしたい」と意欲的。将来は事業所の利用者と老後の住まいをセットにした高齢者施設を作りだと夢はふくらむ。利用者が実家から独立しグループホームで自立することも考える。2人の子どもは社会福祉士の資格や金属加工技術などを取得し、後援者としての協力体制にある。「利益を出し、企業として地域にも何らかの形で還元したい」。

プライベート

「言いだしたらとことんやる」性分をわかってくれている夫と家族に感謝。土いじりが好きで、いただいた胡蝶蘭の花を咲かせたり会社の周りに花を植えたり。「気持ちが落ち着きリフレッシュ出来る元気のモトです」。

深谷（ふかや）　美保（みほ）さん

おうちリフォーム　ハンドメイド雑貨
レーヴ デザイン　代表

西日本初の女性の現場監督

店舗設計に興味を持ち、地元の専門学校卒業後、設計とリフォームの会社に就職。入社時は経理部門を担当したが、希望を言い続け念願かなって現場へ。25才の時、インテリアコーディネーターの資格を取得。転職後の会社で西日本初の女性の現場監督になった。経験を積み独立。2012年5月「レーヴデザイン」を立ち上げた。別府市出身。

現場では依頼者の声大切に主張

別府市青山町のビル1階にあるオフィス兼ショップでは大分の作家たちの作品や雑貨も販売する。毎年、夏休みの時期には子ども対象のワークショップを企画、大勢の人で賑わう。家事も含み家にいる時間が長い女性ならではの目線でのリフォーム。依頼者の希望をしっかり聞き、満足してもらえるよう仕上げるには「営業マンや職人さんとケンカすることも度々。お客さんの声は大切で譲れない、負けられない」と熱い心で臨む。台所や風呂、トイレなどのリフォームは、インテリアコーディネーターとしての感性を生かして喜ばれているが現場は男性優位の職人の世界。最初は掃除や片付けを進んで行い「場をなごませることを心掛けた」。

資格を取得、学んできたことが自信に

この世界に入るきっかけは子どもの頃に見たテレビドラマ。今井美樹が演じるインテリアコーディネーターに憧れた。高校卒業後、地元の専門学校で学び店舗の設計施工会社に就職。最初は事務職だったが、希望して現場に異動。現場が好きでいつも顔を出していたら「工事ねぇちゃん」とあだ名で呼ばれるようになり、現場に溶け込んでいった。現場は「コテコテの男社会。身体能力は男性にかなわないけど、男女それぞれハードとソフトの特性を生かせばいいと思う」。勤めていた頃は作業服姿で朝7時から夕方以降も会社に戻り、業社への発注作業など深夜に及ぶこともあった。25才でインテリアコーディネーターの資格を取得し、勤めていたハウスメーカーで西日本で初めて女性の現場監督になった。資格はそれまで学んで身につけた知識が自信となり、仕事をする上で説得力につながる。「ぜひチャレンジすべき」と深谷さん。2級建築士、福祉環境コーディネーター2級の資格も取得している。

主婦の目線、リフォームに生かす

工事現場ではノウハウを経験しながら覚え、わからないことは自分で調べ、それでもわからないことは県外のメーカーまで出向いたり、先輩にしつこいくらいたずね自分の身につけた。建築会社やハウスメーカーの現場で約20年、経験を積み独立。夫や自営業の夫の母も理解を示してくれた。2012年5月に現在地にリフォームのオフィスと雑貨店をオープンした。主婦の目線で客のニーズに答え希望をカタチにしていく仕事にやり甲斐や楽しさを感じている。「いつも応援してくれる誰かがいてくれる。まわりの人にすごく助けられている」とも。

修繕、メンテナンスも丁寧

現在は住宅やマンションのリフォーム、企画設計、施工管理。「女性が元気でハッピーになれる家こそ家族みんなのハッピーにつながる」との思いから、家族の笑顔いっぱいの夢のあるリフォームを心掛ける。修繕、メンテナンス、プチリフォーム等々、小さなリフォームにも手を抜かない。店名のReve（レーヴ）とはフランス語で「夢」の意味。夢あふれるこだわりの雑貨が揃う。

プライベート

外に出て人に会うことが楽しい。海を見ることなど元気をチャージ。小学生の息子とのキャッチボールも楽しみの一つ。

森（もり）　理英（りえ）さん

大分日産自動車株式会社　古国府店販売第2課　カーライフアドバイザー

営業職は喜びの仕事

営業職は数字で評価される。長崎で学生時代を過し、当時、女性活用の方針を打ち出していた自動車会社に2005年就職。入社時は担当の顧客を持たず、自動車はもちろん、車検や自動車保険の飛び込み営業。現在9年目。営業職のほかカーライフアドバイザーとして週1回店舗の展示場で対応。フロアの環境整備にも女性の感性を生かす。大分市出身。

飛び込み営業で顧客の要望を知る

入社試験の面接で「好きな車は？」との質問に「多すぎて決められません」と答えて合格。実は、あまり日産車のことを知らず入社。会社は女性活用の方針を打ち出していたが、当時先輩の女性たちは退職。社内の空気は「女性は仕事を教えたり、引き継いでも長続きしないだろう」という雰囲気。「どうせ辞めるだろうと思われるのが悔しいので、何くそっと思って頑張った」と明るい笑顔。現在はそんな雰囲気は無くなっている。入社当時は飛び込み営業が主で、入社1年目に注文を受けた自動車の色違いという大きなミスを体験した。3年目くらいから顧客を担当するようになり仕事が面白くなった。整備のことは現場に顔を出して教えてもらった。わからないことはそのままにせず教わり、学び、確認の大切さも思い知った。

担当の顧客を任せてもらえて1人前

担当の顧客を任せてもらうようになり「1人前として認められたことを実感」。営業職は売ることへの苦労と思っていたが、お客様の望む車を買って頂く喜びの仕事だと思えるようになった。「3年後の自分のために土を耕し種をまき、肥料を与え、手をかけて花が咲き実がなる」と指導されたことをいつも心がけ続けている。良き上司に恵まれた。女性営業の少ない職種なので、同業他社の女性営業担当者との懇親会、情報交換も行っている。入社時は同じ店舗に女性営業の先輩はいなかったが、後輩には自分の反省を踏まえてアドバイスや声をかけている。女性ならではの目線や立場で出来ることが色々あることがわかってきた。

店舗の環境整備は女性ならではの気配り

営業は数字で評価される。売上げ表の掲示など目に見える自分の成果を励みにモチベーションを上げる。「担当のお客様は家族も含めフォローし、お客様と一緒に悩んだり、納車の喜びに触れるなど1日があっという間に過ぎる」。クレームから始まることもあり、しっかり声を受け止めるよう心がけている。展示フロアーや商談スペースなど店舗整備は女性ならではの気配りや心遣いが生かされる。季節感がある窓辺のデコレーションや観葉植物の配置、商談を気持ちよくする荷物置き用のカゴにも一工夫。会社やメーカー協賛で開くレディースフェアではスイーツを提案。店舗の評価アップにも取り組む。

職場の先輩と結婚、共働き

2014年は4月からの消費税増税で3月は忙しかったが、基本的に毎週火曜、第1水曜日が定休。2010年に職場結婚。職場では旧姓で仕事をしている。「家庭での妻としての自分と、仕事をする自分との気持ちの切替えになっている」。仕事上でも先輩の夫はよき相談相手。先に帰った時は食事の支度など家事を協力的にやってくれ助かっている。「今後も仕事は続けていきたい」。子育てとの両立をしている先輩が他店舗にいるので、いろいろ相談して乗り切っていきたい。

プライベート

同業他者の女性仲間や友達と食事やお茶でリフレッシュ。読書やビデオ撮りした韓流ドラマも楽しむ。学生時代はバンドを組みベースとボーカル担当。ステージでのサプライズや形をつくり上げていく楽しみを仕事につなげたい。

山路（やまじ）　しのぶさん

株式会社文化財保存活用研究所　代表取締役

石像仏の保存、修復を手がける

県内はもとより九州の石像仏文化を支える文化財の保存、修復を手がける。大学は経済学部卒。結婚した夫は保存科学の博士号までとった専門家。教職に就いた夫に変わって主婦からの転身。2009年、株式会社「文化財保存活用研究所」を設立。考古学に科学をプラスした新分野の保存科学の仕事に強い使命感を抱く。災害の多い昨今、「文化財のハザードマップの必要性」を説く。大分市出身。

大分県は石像磨崖仏の宝庫

大分県は石像磨崖仏の宝庫で、国・県の重要文化財は多い。県北の熊野磨崖仏、大分市内には岩屋寺磨崖仏、高瀬石崖仏、元町磨崖仏など身近に感じるが、こうした石仏の劣化を調べ保存・修復を手がける。元町石仏は阿蘇の噴火による凝灰石を堀った磨崖仏で平安後期の作品。昨今の亜熱帯的な気候は劣化を促進させる。「石仏は人間と同じように定期検診や手術が必要なんです」と山路さん。夫の意思を継いで「文化財保存活用研究所」を設立して6年。調査し修復したら終わりではなく維持管理、そして文化財の活用を地域と一緒に行っていくことが必要という。

新分野の保存科学に強い使命感

設立当時は県のインキュベーション施設や大分県産業創造機構などの支援や育成を受けたが、現在は植田地区に古民家を購入し看板を掲げた。専門分野の大学を卒業した研究員も2人。保存・修復は環境調査に始まり石像の状態を把握し、劣化等を防ぐための処置を施す。考古学に科学をプラスした新しい分野の仕事という。「劣化を促進させないためにも、温度や湿度、光など一定した環境をつくることが大切です」。調査や保存・修復の依頼は県外からも寄せられる。根気のいる緻密な作業が続くが、やりとげた時の達成感。「磨崖仏は、地球に彫られた芸術品でもある。そこにロマンを感じます」。状態をモニタリングする技術を追求し、高い専門性を自負する。

夫の志継いで専業主婦から転身

大学は経済学部と畑違い。結婚した夫は史学科を卒業、文化財に詳しく保存科学の博士号までとった専門家。夫の活躍を傍らで応援していた。ところが夫は教職に就き「これも運命」と代表者になった。当時2人の子どもは小学3年生。専業主婦から保存・修復の専門職へと転身したが「子どもは自立心旺盛で食事などの手伝いもでき助かりました」。研究所には石像から採取したコケや石のかけら、木片、土など様々なモノを検査する工房も併設。「これは縄文時代の木片です。海の底にあったもの」。石造仏のほか埋没樹木の保存処理、お墓のクリーニングと仕事は多岐にわたる。

石像仏の維持管理は地域と連携

温暖化等による気候変動の影響、自然災害。文化財の環境整備の急務を強く意識する。朽ちていくスピードが早い。維持管理は地域行政、専門家の連携が必要という。災害に対してのハザードマップも多面的に使えないか。周りに支えられてここまでこれたが、石像仏を地域の資産として活用することが目的の一つ。元町石仏や岩屋寺磨崖仏など大分市の市街地から近い。子どもたちや若い女性たちにも関心を持ってもらいたいと強く意識する。

「夫の夢」をサポートする楽しさ

若いスタッフをリードしながらビジネスとしての安定も視野に入れる。仕事を通して得られるやり甲斐や達成感。修復し環境を整えた石像仏は人の記憶に残り、守り継がれていく。「夫の夢を叶える」山路さんの道はまだまだ続く。

プライベート

子どもたちは中学生に育った。休日は家族で過す時間を大切にするが「つい仕事の話になってしまいます」。

吉田（よしだ）　聖子（せいこ）さん

株式会社トキハインダストリー　アテオ岩田町店　店長

女性の特性生かせるサービス業

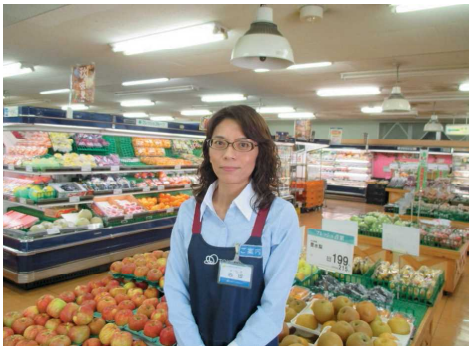
中学の頃からバスケットボール部に入部。大学は体育科に進み、卒業後は実業団のバスケットボールチームがあるトキハインダストリーに入社。情報処理室に勤務しながらチームの一員として活躍。その後は売場に異動。南大分センターの陶器売場をはじめ現場を体験。春日店店長を経て今春からアテオ岩田町の店長に着任。大分市出身。

26店舗中、唯一の女性店長

体育系の一面を持つ女性店長。大学を卒業後、1990年実業団のバスケットボールチームのあるトキハインダストリーに入社。情報処理に配属され社内の各種データ入力や集計のオペレーション。仕事を終え19時30分から22時までバスケットボールの練習をするハードな日々。キャプテンとして県外遠征や試合をこなし国体にも出場し活躍するが、入社9年目に廃部。売場を体験する。南大分センターの陶器売場をふり出しに各店の売り場を経験。中央卸市場の大分青果へ3年間出向。その後、わさだタウンのスーパーマーケットを経て2013年3月春日店店長に抜擢され、2014年3月から現在のアテオ岩田町店店長に就任する。トキハインダストリー26店舗中唯一の女性店長。社員1人、パート27名を束ねる。

各売り場の体験が今を支える

アテオのような小型店舗の店長は何んでも屋。新しい部署で人も仕事もゼロからのスタートだが、今までの社内の色々な部署での経験が財産。バスケット部でもキャプテンを務めたが、店舗運営もチームワークが大切。店長だからといって上から目線ではなく、現場の声に耳を傾け、一緒に考える。常々「何でも言って、意見を言って」と声をかける。異動で様々な売り場に配属され、色々な部署を経験出来たことが今の自分を支えている。本部のシステム、各店舗の売り場、出向体験などバランスよく全体を見る店長としてはいい経験になった。品出しなど力仕事もあるがサービス業は接客が基本なので「女性ならではの気配りや心遣いなど特性を生かせる仕事だと思う」と吉田さん。



信用、信頼を得て地域で選ばれる店に

職場では働きやすい雰囲気、職場作りを目指す。スキルも大切だがコミュニケーション第一。常にメンバーの声をよく聞くようにしており「女性店長だから言いやすいと言われるのはうれしい」と吉田さん。店長着任の際の歓迎会は大変賑やかで楽しい会だった。1人ひとりもパワフルで頼もしく感じた。店舗のチームワークは大変良く、親密度は深い。建物は新しくないが、利用客から「よく話を聞いてくれる」とか「要望に応えてくれる」と言われるなど接客が大切。商品はもちろん、店員の対応も含んで「信用、信頼を得て地域で選ばれる店になりたい」。

周囲の人やスタッフに恵まれて

勤務は原則8時から17時。営業時間は9時30分から20時だが17時以降は本部よりOBの夜間店長（男性）が勤務。休みは月間8～9日。その際も本部からサポートの代理店長が対応し、切れ目のないサービスを提供している。「今まで行く先々で周りからサポートしてもらい助けられた。人やスタッフに恵まれてきた」と吉田さん。「人間関係が一番大事」。

プライベート

バスケットボールで体を動かすことが良い気分転換。友達や社会人仲間でチームを作り、夜や休日に集ってゲームをするのが楽しみ。バスケットボールの審判の資格も有し、休日の審判を引き受ける。

吉長（よしなが）　あゆさん
無農薬野菜栽培「やさいのきもち」代表

有機農法を学び栽培とケータリング

2014年の夏、植田地区の田畑が広がる集落に古民家を改装してケータリング用のキッチンと試食ができるアトリエを造った。無農薬野菜を栽培する「やさいのきもち」を立ち上げたのは2013年。スポーツクラブの支配人から180度転換。調理学校、農業大学校で基礎を学び無農薬野菜づくりを志した。新鮮な旬の野菜を使った料理のケータリングは法事や交流会の新サービスとして「安全・安心」を運ぶ。

植田地区に農地を借り野菜栽培

市街地から近い植田地区に150坪の農地を借り無農薬野菜作りに挑戦したのは2013年の春。2011年4月から1年間、調理学校に通い食材に触れるなかで野菜に興味を持った。2012年4月から三重町の農業大学校研修部で1年間、有機農法を学び、旬の野菜のおいしさに目覚める。「安心・安全な野菜を旬の時期に消費者の口に届けたい」。無農薬野菜づくりとケータリングを2本柱に「やさいのきもち」を立ち上げた。国からの創業補助金の採択をうけ、事業計画は一気に早まった。調理学校で一緒だった友人がスタッフに加わり、料理の出張サービスもスタートさせた。

古民家借りケータリングのキッチン

市内木上にある古民家を借りアトリエとして改造、ケータリングのキッチンに加え、今年9月には料理の試食ができる部屋も造った。すぐ前の畑で採れた野菜を調理し試食してもらう。畑の入口には「やさいのきもち」の大きな看板。2014年の夏はズッキーニの料理が人気だった。スープに始まりオードブル、メイン、デザートまで凝った料理の数々。ジャムや飲み物も旬の野菜や果実を使う。「旬ならではの味わいが好評です」。法事や交流会、会社の昼食会などへ出張サービスしている。安心・安全のものは需要があり、次のステップの計画も持ち上がっている。

スポーツインストラクターから農業へ

出身は中津市。調理の世界に入る前は北九州市のスポーツクラブでインストラクターをしていた。イベントで沖縄や離島に出かけることも多く野外で食事の準備をするなかで調理をする楽しさを感じていた。調理師の資格を持ち、病院やホテルで婚礼料理を作る母の影響も強かった。料理学校を経て農業大学校へ。野菜づくりにためらいはなかった。卒業後は植田地区に150坪、その後、庄内に600坪、木上に30坪…と借り受ける農地は次々に増え、野菜栽培も本格的。とりわけ6月から9月にかけては収穫に追われる。地域の農業に従事する大先輩に教わることも多い。「気軽に立ち寄ってくれ、いろいろ話を聞かせてもらっています」。コミュニケーションを大事にその地に溶け込み、豊かな大地の恵みを愛情豊かに育てる。

「食」の専門家とコラボレーション

三重町の農業大学校研修部の同期は25名。内4名が女性で、卒業後も交流会を開き情報交換が行われている。3年を目安に次のステップアップも視野に入れる。栄養管理士や栄養士、保健士、フードコーディネーターとのコラボレーション。ゆくゆくは就農者の資格を有し農業法人として事業を拡大したいと考える。食を通して高齢者の健康維持をバックアップし、医療費の削減につなげたい。「食べること」は「生きること」。農地を守り「食の安全」を追求しながら新しいビジネスを拓いていく。

プライベート

仕事が趣味というが、年間60本の映画を観る映画好き。ジャンルはこだわらず、食卓やインテリア、テーブルなど「いろいろ参考になります」。野菜の成長を見守るのが何よりの楽しみ。

吉野（よしの）　泰代（やすよ）さん

株式会社レゾネイト　レゾネイトクラブくじゅう　料飲部マネージャー

まごころこもった笑顔で接客

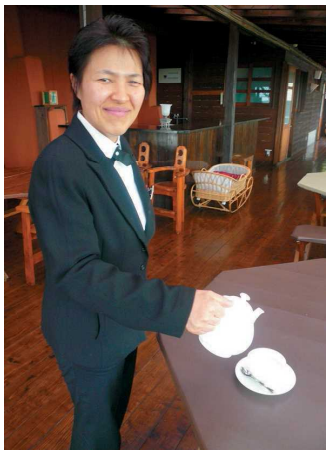
雄大な久住の自然がまるごと観光できる「レゾネイトクラブくじゅう」。オープンは1993年12月。開業当時からのメンバー。地元の高校を卒業後、接客業に従事。「客の名前を覚える、まごころこもった笑顔」をモットーに“朝の顔”として宿泊客をもてなす。人対人の接客業。気配り・目配りを大切に「100人いれば100通りの接客が求められます」と爽やかな笑顔。

地元採用、念願の接客係を志望

久住の地元で生まれ育った。「レゾネイトクラブくじゅう」のオープンを知って接客業を志望。経理の仕事についていたが、一念発起してチャレンジ。就職したのは開業準備がスタートする1992年。同期は6人。サービス研修で軽井沢のホテルで1ヵ月学んだ。「レストランでのサービスでお客さまが“ありがとう”と喜んでくれたのが忘れられない」。同期は高学歴や県外の人もいた。当時は地元＝田舎がコンプレックスだったが、それをバネに「客の名前を覚える、誰にも負けない笑顔」を自身に課した。1年半は事務職だったがその後、念願の料飲部に異動。レストランでのサービス業務をメインに、60室の客室対応など幅広く接客に携わった。リピーター客も多く「おかえりなさい」と笑顔で迎える。

爽やかな1日のスタート“朝の顔”

ホテルの朝は早い。6時半に出社し朝食の準備にかかる。地元の食材を使ったメニューは好評という。卵、野菜は朝、収穫した新鮮なもの。肉類も全て地元産。「おいしいと食べてくれるのが何よりも励みになります」。8月は観光客で最も賑わう季節。毎年、訪れる客も少なくない。「第2のふるさとと思ってくれる方もいます。おかえりなさいと笑顔で迎えます」。2013年はホテル創業20周年。利用客から祝いの菓子が届き感激した。結婚し子どもと一緒に訪れる人もいる。名前を覚えてくれていることに客も笑顔になる。地域密着型のコンシェルジュ。吉野さんの“朝の顔”が爽やかな1日のスタートを約束する。



母親目線でスタッフの成長見守る

料飲部のサービス担当になって20年弱。現在はマネージャーとして後輩の指導にも携わる。サービスの基本は「まごころ」という。100人いれば100人の接客が求められる。マニュアル通りにはいかない。料理を出すタイミングは目配り、気配りが求められる。今、何を欲しているのか瞬時に察知しなければならない。「母親の目線になってスタッフの成長を見ている自分がいます」と笑う。ここで学んだことはどこでも通用する。「自信をもって飛び立ってほしい」。

周囲の人々に支えられて

20才を筆頭に3人の子どもがいる。椎茸や米を栽培する実家に同居。母親の協力を得て仕事と子育てを両立。「助け合う社内の雰囲気、学童保育を活用するなど地域に支えられた」。職場体験に来た子どもが働く母親の姿を見て「誇りに思う」と感想文。「うれしかった」と大きな笑顔。くじゅうの魅力は「自然、星、花」。他の観光施設とも連携しながら久住高原の素晴らしさをアピールする。レゾネイトは「共鳴する」の意味。人と自然が共鳴するスポットとして「一生懸命、おもてなしして喜んでもらいたい」。

プライベート

休日は大分市まで足をのばし「岩盤浴やリンパマッサージで体をほぐすのが楽しみ」。実家の椎茸栽培の手伝いもリフレッシュになります。

渡辺（わたなべ）　秋代（あきよ）さん

株式会社太田旗店　企画制作部

あるものを有効に使う生活

　エコブームで、大量に廃棄された布の切れ端を利用して作った手提げバッグ「笑心太（エコータ）」が大評判。モノ作りが好き、ミシンが好きで縫製工場に勤め、1997年から太田旗店の工場に勤務。工場部の係長として現場を指導。2013年に定年を迎えたが、引きつづき10月より新たに「商品開発」の役割を担う。百貨店の催事やウェブショップなどの取り組みもスタートした。大分市佐賀関出身。

大量に廃棄されていた布でエコバッグ

「笑心太」の誕生は5年くらい前。大量に廃棄されていた、染色済の残布等を利用して何か作ってはという会長からの提案。遊歩公園で第2土曜に開かれていた朝市に再利用のスポンジも使いクッションを作って無料で配布。手提げバッグを100円で販売したところ、エコブームも手伝い売り切れるくらい大好評。「捨てればゴミになるものも活用することで新しい命が吹き込まれ、商品として使ってもらえることはすばらしい」と渡辺さん。楽しみながらでないと良いものはできない。新作アイデアのために常にアンテナを立て毎日が勉強。布の柄の出し方や組み合わせ、色合いは何通りもあり裏地で工夫することも考える。

チャレンジ的なモノ作り「限定商品」

　縫製の仕事を始めたのは子育てが一段落した平成元年。子どもの頃からモノ作りが好きで、小学生の頃から編物やレース編み。結婚後は自分や子どもの洋服は手作りしていた。家の近くに縫製工場が出来たのを機に就職。工業用ミシンを扱い「好きなミシンでモノ作りに係りたい」という思いを強くしていった。その後太田旗店に勤務。工場では定番商品を納期にそって大量にこなしていく作業だったが、現在の限定品作りに携わる楽しさは大きい。「和雑貨府内笑心太」で販売する限定商品は、毎週1種類を5個作って納品。評判や売れ方によって定番商品化の叩き台にするため、チャレンジ的なモノ作り。「府内笑心太」から毎日、限定商品の売上げ数字やお客様の声、リクエスト等の情報が届く。

女性の多い職場で指導やまとめ役

　限定商品は2人ペアで作る。相棒は若手の社員。固定観念を持つことなく、色々な立場や年齢層の声を聞くようにしている。限定品ということもあり、かなり手をかけて作ることもあるが「使ってもらえるもの、選んでもらえるものを目指している」と渡辺さん。工場勤務の頃は係長として職場で指導やまとめ役を担った。女性ばかりの職場なので甘えが出ることもある。「タイムカードを押して帰るまでが仕事。けじめをつけるよう指導していた」

定年後も大好きなミシンと係る仕事

　最初の仕事は下の息子が小学6年、実母が元気で支えてくれ、職場が家の近くということもよかった。その実母が病気になったときには、弟の嫁と協力し在宅で看取ることが出来た。会社の理解があり、時間のやりくりや調整してもらえ助かった。忙しく働くことが自分だと思うし「好きなミシンと離れたくない」。定年後も引き続き働けるのは幸せ、新しく商品開発にも係ることになった。百貨店の催事やウェブショップの取り組みもスタートしている。新しい作品を生み出すのは苦しい作業ではあるが、「出来上がった喜びはひとしお。自分なりのこだわりを持って新作にチャレンジしていきたい」。

プライベート

　夫は定年後10年。昼食・夕食は準備してくれる等サポート。趣味のガーデニングに癒される。仕事と同様、枯れ草で肥料をつくり、花を咲かせ、出来た種で育てる「あるものを有効に使う生活心掛けています」。

大分県の取組

大分県男女共同参画推進事業者顕彰
おおいた輝く女性ネット☆交流会
働きたい女性のための託児サービス
HP　おおいた女性チャレンジサイト
おおいたの女性の就労について

大分県男女共同参画推進事業者顕彰

誰もが働きやすい職場づくりを推進し、企業の取組を促進するため、男女共同参画の推進やワーク・ライフ・バランスに積極的に取り組む企業を表彰しています。平成25年度までに26事業者を表彰しています。

年 度	受賞事業者	所在地	業 種
H18（第1回）	医療法人 敬和会 大分岡病院	大分市	医療業
	株式会社 太田旗店	大分市	旗製造業
H19（第2回）	社会福祉法人 安岐の郷	国東市	介護老人福祉施設
	株式会社 トキハ	大分市	小売業
	医療法人 親和会 衛藤病院	大分市	医療業
H20（第3回）	株式会社 NTS通信サービス	大分市	小売業
	株式会社 三信工業	大分市	建設業
	特定医療法人 明徳会 佐藤第一病院	宇佐市	医療業
H21（第4回）	株式会社 オーイーシー	大分市	ソフトウェア情報サービス業
	フンドーキン醤油 株式会社	臼杵市	食料品製造業
	キツキハーネス 有限会社	杵築市	製造業
	健裕会 永冨脳神経外科病院	大分市	医療業
H22（第5回）	大分瓦斯 株式会社	別府市	ガス業
	大分県医療生活協同組合	大分市	医療業
	株式会社 トキハインダストリー	大分市	小売業
	株式会社 日豊ケアサービス	豊後高田市	介護業
	株式会社 日田ビル管理センター	日田市	ビルメンテナンス業
H23（第6回）	大分県厚生農業協同組合連合会	別府市	医療業
	大分みらい信用金庫	別府市	金融業
	社会福祉法人 太陽の家	別府市	医療・福祉業
H24（第7回）	医療法人 恵愛会 中村病院	別府市	医療業
	株式会社 豊和銀行	大分市	銀行業
	社会福祉法人 萌葱の郷	豊後大野市	社会福祉業
H25（第8回）	社会医療法人財団 天心堂	大分市	医療業
	株式会社 永冨調剤薬局	大分市	調剤薬局
	社会福祉法人 みのり村	杵築市	社会福祉業

女性管理職のネットワーク「おおいた輝く女性ネット☆交流会」

県内企業等で活躍する女性管理職はまだまだ人数が少ない状況です。女性管理職の方々がネットワークを組織することにより、交流を深め、情報を共有し、活動の幅が広がり更に活躍していただければ、と思い、グループディスカッションや交流会を実施しています。そんな姿を見て、後に続く女性が増えてくることも期待しています。

参加企業名（50音順） 45企業 51名参加

（社）安岐の郷
（株）ＮＴＳ通信サービス
（株）エフエム大分
（株）オーイーシー
おおいたインフォメーションハウス（株）
（社医）敬和会大分岡病院
（株）大分銀行
大分県企業局
（株）大分県自治体共同アウトソーシングセンター
大分県東部保健所国東保健部
大分交通（株）
大分市美術館
大分商工会議所
大分市稙田支所
大分信用金庫
（株）大分放送
大分みらい信用金庫
大分労働局
九州電力（株）中津支社
生活協同組合 コープおおいた
（医）明徳会 佐藤第一病院
三信産業（株）
三和酒類（株）
住友生命保険相互会社大分支店
ソニー・太陽（株）
（社）太陽の家
（株）ダイレクトマーケティンググループ
（株）ＴＭエンタテインメント
（株）テレビ大分
（株）トキハ
（医）健裕会 永冨脳神経外科病院
（株）永冨調剤薬局
（株）日豊ケアサービス
（株）ネオマルスコーポレーション
（株）ファイナンス・ブレーン
藤丸建設（有）
フューチャーインスペース（株）
豊後高田市役所
フンドーキン醤油（株）
別府市役所
学校法人　別府大学
（株）豊和銀行
（社）みのり村
（社）萌葱の郷
立命館アジア太平洋大学

（平成27年1月末）

働きたい女性のための託児サービス

結婚や育児、介護等でいったん退職した女性が再就職等のためにハローワークなどで行う求職活動や面接、試験等の際に、無料の一時託児を実施しています。
大分市・別府市・中津市の3カ所で実施中。どうぞお気軽にご利用ください！

お問い合せ・利用予約・お申込み先 TEL:097-534-2039

〔託児対象〕 満1歳以上から就学前のお子さん
〔　定　員　〕 5名まで

大分市

実施日時 毎週 月～金曜日　9時30分 ～16時30分 ※祝日、12／29～1／3は除く

実施場所 アイネス<大分県消費生活・男女共同参画プラザ>
（大分市東春日町1-1 Ns大分ビル1F）

お申込み ご利用希望日の前日（午前中）までに電話でご予約ください。
※前日が土、日、祝日、年末年始の場合はその前日の午前中までです。

別府市

実施日時 毎週 水・金曜日　9時30分 ～16時30分 ※祝日、12／29～1／3は除く

実施場所 別府市男女共同参画センター あすべっぷ
（別府市大字別府字野口原3030番地1）

お申込み ご利用希望日の前々日（午前中）までに電話でご予約ください。
※前々日が土、日、祝日、年末年始の場合はその前日の午前中までです。

中津市

実施日時 毎週 月・水曜日　9時30分 ～16時30分 ※祝日、12／29～1／3は除く

実施場所 中津市教育福祉センター（中津市沖代町1-1-11）

お申込み ご利用希望日の前々日（午前中）までに電話でご予約ください。
※前々日が土、日、祝日、年末年始の場合はその前日の午前中までです。

〈大分市 アイネス託児室〉

HP おおいた女性チャレンジサイト

大分女性チャレンジ　検索

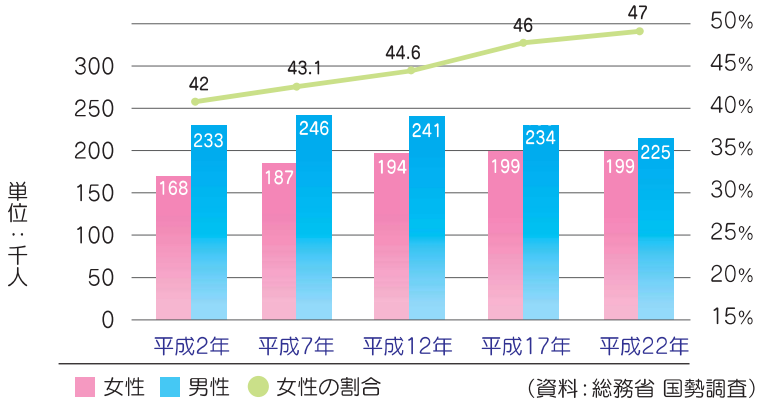
女性のみなさんのチャレンジを応援する総合情報サイトとして、大分県が開設したものです。講座・セミナー、相談窓口といった情報や、個人・団体などの活躍事例などの情報を入手できるようにしたものです。

25年度に
インタビューした
仕事と子育てを
両立させて
がんばっている
女性たちを
紹介しています。

おおいたの女性の就労について

雇用者数の推移（大分県）

折れ線グラフは
雇用者数全体に占める女性の割合

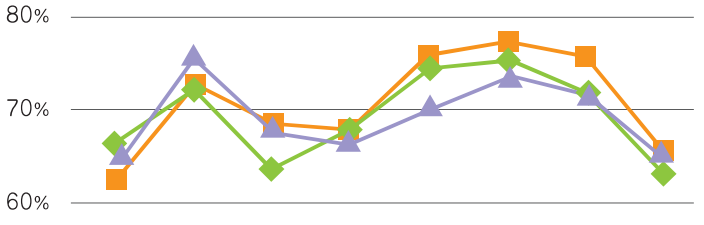


（資料：総務省 国勢調査）

○ 大分県の就業者数と雇用者数

平成22年の国勢調査では、県内の就業者数は、55万451人です。そのうち雇用者数は、42万4944人。女性が19万9620人で、割合は約47%となっており、雇用者に占める女性の割合は年々増加傾向にあります。

H19,24大分県・H24全国女性有業率



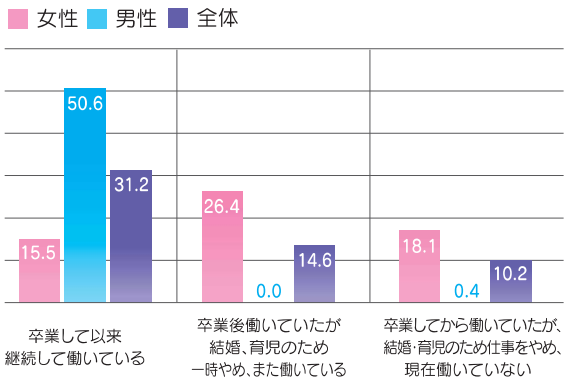
	20～24歳	25～29歳	30～34歳	35～39歳	40～44歳	45～49歳	50～54歳	55～59歳
H24大分県	62.5%	73.2%	68.9%	68.4%	76.4%	78.0%	76.3%	65.1%
H19大分県	67.7%	72.4%	64.0%	68.5%	75.0%	76.2%	73.9%	63.0%
H24全国	66.6%	75.3%	68.2%	67.1%	70.7%	74.6%	73.2%	65.0%

（資料：総務省 就業構造基本調査）

○ 年齢階級別女性有業率

上の図は、女性の有業率のグラフです。出産・育児期の30歳代後半が一番低くなり、アルファベットの「M」に似た曲線を描いています。「M字カーブ」とは、このグラフの形態で、日本人女性の就業状況の特徴を表しています。大分県の女性有業率のH19年とH24年を比較すると20歳～24歳、35歳～39歳以外は率が上昇し、M字の底が浅くなっています。また、H24年の全国平均と比較すると、30歳以上で全国を上回っています。

仕事の継続についての割合

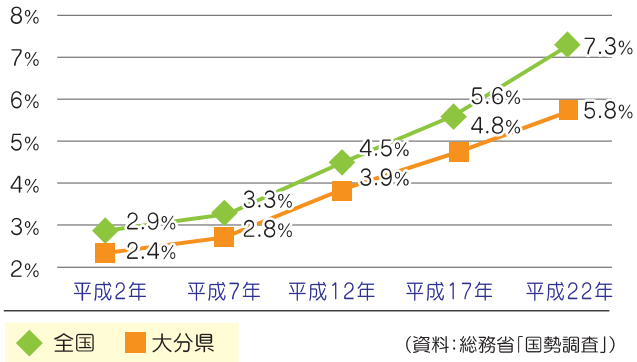


（資料：「大分県男女共同参画社会づくりのための意識調査」平成21年）

○ 仕事を継続している割合

「卒業して以来継続して働き続けている」との回答は、男性は50.6％に対して、女性は15.5％と低い。「卒業してから働いていたが、結婚・育児のため仕事をやめ、現在働いていない」女性は18.1％となっています。

雇用者のうちの管理的職業従事者に占める女性の割合の推移



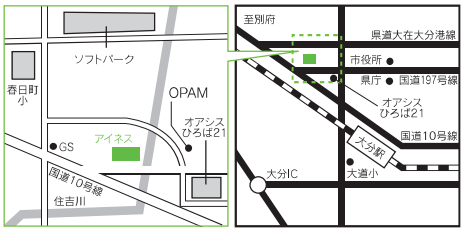
（資料：総務省「国勢調査」）

○ 雇用者のうち管理的職業従事者に占める女性の割合

大分県において昭和60年以降の雇用者のうち管理的職業従事者に占める女性の割合は、上昇傾向にあり、平成22年には5.8％となっていますが、全国平均を下回っています。

大分県消費生活・男女共同参画プラザ《アイネス》
参画推進班

〒870-0037 大分市東春日町1番1号（NS大分ビル1階）
電話 097-534-2039　FAX 097-534-2057
ホームページ　http://www.pref.oita.jp/soshiki/13040
Eメール　oita-sankaku@pref.oita.lg.jp



平成27年2月発行